

次ページへ続く

Continued on next page...

百人一首基礎資料稿

吉 海 直 人

【前書き】

今回は最後の締めくくりとして、少し視点をかえて基礎的研究の成果を載せることにした。附Ⅰには、藤原定家の本歌取り歌をわかる範囲で列挙してみた。また参考のため為家歌もあげてみた。これに定家周辺の歌人達を加えれば、その頃の流行が見極められるかもしれない。附Ⅱは、角川文庫を底本とした総索引である。参考のため本文異同等も吸収し、空見出しも付けておいた。附Ⅲは百人一首歌出典一覧を作ってみた。これで各歌の享受史が展望できるはずである。また出典毎に大きな本文移動も掲載しておいた。附Ⅳは百人一首類書翻刻五種で、参考のため、1 新百人一首、2 後撰百人一首、3 武家百人一首、4 大百人一首、5 愛国百人一首を翻刻した。

本来ならば、これに百人一首享受資料集成を付け加えるはずであったが、余りにも膨大になったので、残念ながら割愛した。今後も百人一首

の総合研究を手がけていくつもりなので、機会をあらためて発表したい。

【目次】

附Ⅰ	定家本歌取歌一覧（付、為家歌）	1～100
附Ⅱ	百人一首総索引（五十音順）	
附Ⅲ	百人一首歌出典一覧	1～100
附Ⅳ	百人一首類書翻刻五種	1～5

附Ⅰ 定家本歌取歌一覧（付、為家歌）

【はじめに】

一体藤原定家は、百人一首をどれ程愛好していたのであろうか。試みに、定家が百人一首を本歌取りした歌を調べ、それを一覧表にまとめて

みた（カッコ内は歌番号である）。もちろん、これでどれだけのことが言えるのかわからないが、少なくとも定家の嗜好を探究る貴重な資料であることは間違いない。ついでに、定家の息子為家の本歌取り歌についてもあげておいた（為一）は私家集大成為家集の歌番号である。それは百人一首の成書を初めとして、為家と百人一首の関係が、予想以上に深いと考えられるからである。

歌の頭に、本歌と認定できるものには◎印を、参考歌程度のものには△印を付した。本歌取りか否かの認定には問題もあるけれども、まあ一つの目安と思って見て頂きたい。ただし定家と同時代の歌に本歌取り歌がないのは当然である。

なお百人一首の本文は、島津忠夫『百人一首』（角川文庫）掲載の伝素庵筆本を使用し、本文右傍の仮名遣い注記もそのまま利用させて頂いた。附Ⅱの総索引の底本も同様である。ただし、おどり字は仮名に戻すなど、若干私に改訂している。また参考のため、主な本文異同もあげておいた。底本の使用を御許可下さった島津忠夫先生に、心から御礼申し上げます。

【参考文献】

- a 島津忠夫『百人一首』（角川文庫）昭和44年12月
- b 熊沢藤子『百人一首』と藤原定家の歌について」解釈25-9 昭和54年9月
- c 久保田淳『訳注藤原定家全歌集上下』（河出書房新社）上巻513頁 昭和

和60年3月、下巻 534頁 昭和61年6月

1 秋の田のかりほの庵のとまをあらみわがころもでは露にぬれつつ

〔大智天皇〕

◎唐衣かりいほのとこの露寒み萩のにしきをかさねてぞきる（941）

△伏見山つまどふしかの涙をやりほの庵の萩の上の露（1843）

◎秋の田のかり庵の露はをきながら月にぞしほる夜はの衣手

（為一648）

◎ことはりに過てぞぬるる秋の田のかりほの庵の露のやどりは

（為一1261）

2 春すぎて夏来にけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山

〔持統天皇〕

◎大井河かはらぬみせきおのれさへ夏きにけりと衣ほす也（1221）

◎白妙の衣ほすてふ夏のきてかきねもたわにさける卯花（1887）

◎夏の来て卯の花白くぬぎかふる衣乾るらし天の香具山（4054）

△花ざかり霞の衣ほこよびてみね白たへのあまの香具山（2058）

◎五月雨は雲のおりはへ夏衣ほさでいくかぞあまのかご山（為一381）

3 足引の山鳥の尾のしだりおのながながし夜をひとりかもねん

〔柿本人丸〕

◎ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月かけ（1061）

◎うかりける山鳥の尾のひとりねよ秋ぞちぎりしながき夜にとも

(225)

△なきぬなりゆふつけ鳥のしだり尾のおのれにも似ぬよはのみじかさ

(2116)

4 田子の浦にうち出てみれば白妙のふじのたかねに雪はふりつつ

〔山邊赤人〕

5 おくやまに紅葉踏分なく鹿の声きくときぞあきは悲しき 〔猿丸大夫〕

◎秋山は紅葉ふみわけとふ人も声きく鹿の音にぞなきぬる (3332)

△龍田山紅葉ふみわけたづぬればゆふつけどりのこゑのみぞする

(352)

◎おく山は木葉ふみわけ鹿ばかりわがみちまよふねこそなかるれ

(為I 535)

6 かささぎのわたせる橋にをくしものしろきをみれば夜ぞふけにける^お

〔中納言家持〕

△神な月しぐれてきたるかささぎの羽に霜おきさゆる夜のそで (1710)

△わすれずよみはしの霜のながき夜になれしながらの雲の上の月

(2177)

△あまつ風はつ雪白しかささぎのとわたるはしのありあけの空 (2353)

△天河夜わたる月もこほるらむ霜にしもおくかささぎのはし (3305)

7 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも 〔安倍仲磨〕

△さしのぼるみかさの山の峯からに又たぐひなくさやかなる月 (2173)

8 我庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふ也^{らむ} 〔喜撰法師〕

◎春日野やまもるみ山のしるしとてみやこの西もしかぞすみける

(2402)

◎わが庵は峯のさはらしかぞかる月にはなるな秋の夕露 (2541)

△おのづから身を宇治山にやどかればさもあらぬ空の月もすみけり

(1753)

△さても猶たづねてとはんかすみ立みやこのたつみ山の遠方 (2894)

9 花のいろはうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに

〔小野小町〕

◎たづね見る花のところもかはりけり身はいたづらにながめせしまに (1408)

◎春よただつゆのたまゆらながめしてなぐさむ花の色は移ぬ (1514)

◎さくら花うつりにけりなと許をなげきもあへずつもる春哉 (1637)

◎さくら色の袖もひとへにかはるまでうつりにけりなすぐる月日は

(1689)

◎わが身よにふるともなしのながめてしていく春風に花のちるらん

(2088)

◎足引の山路にはあらずつれづれと我身世にふるながめする里 (3264)

△かつをしむながめもうつる庭の色よ何を梢の冬にのこさむ (841)

△ももちどりこゑや昔のそれならぬわが身ふりゆく春雨のそら (908)

◎あはれうき我身世にふるならひ哉うつるふ花の時のまみず

(為143)

10 これやこの行も帰るも別れてはしるもしらぬも相坂の関 [蟬丸]

◎しるしらぬ相坂山のかひもなし霞にすぐる関のよそめは (1105)

◎山ざくら花のせきもる逢坂はゆくもかへるもわかれかねつつ (2089)

△今よりのゆききもしらぬ逢坂にあはれなげ木の関をすゑつつ (1160)

◎けふはまたしるもしらぬもあふ坂の秋のわかれや思ひわかれん

(為180)

11 わたのはら八十嶋かけて漕出ぬと人にはつげよあまのつりぶね

[参議筆]

12 あまつ風雲のかよひ路吹きとぢよ乙女のすがたしばしとどめん

[僧止遍昭]

◎あまつ風さはりし雲はふきとぢつをとめのすがた花ににほひて

(795)

◎白妙の天の羽衣つらねきてをとめまちとる雲の通路 (1809)

◎ふかき夜にをとめのすがた風とちて雲路にみてる萬代のこゑ (2983)

◎天つ風をとめの袖にさゆる夜はおもひいでもねられざりけり

△日かげさすをとめのすがた我も見きおはずはけふの千世のはじめに

(3729)

△忘れぬをとめの姿世々ふりてわが見し空の月ぞはるけき

(3828)

13 つくばねの峯より落るみなけるの川こひぞつもりて渚となりぬる

[陽成院]

◎袖のうへも恋ぞつもりてふちとなる人をば見ねのよそのたぎつせ

(1377)

◎みなの河岸よりおつる桜花にほひのふちのえやはせかるる

(2085)

△行春のながれてはやきみなの川かすみの淵に曇る月影 (3577)

14 陸奥のしのぶもちずり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくに

[河原左大臣]

◎春日野のかすみの衣山かぜにしのぶもちずりみだれてぞゆく (2030)

◎そでぬらすしのぶもちずりたがためにみだれてもろき宮木野の露

(2237)

◎あふことはしのぶの衣あはれなどまれなる色にみだれそめけん

(2446)

◎みちのくのしのぶもちずりみだれつつ色にを恋ん思ひそめてき

(3079)

△ふみしだく安積の沼の夏草にかつみだれそふしのぶもちずり

(1862)

△ともしする葉山しげ山露ふかしみだれやしぬるしのぶもぢずり

(2932)

△あだし野のをがやが下葉たがために乱そめたる暮を待らん (3589)

15 君がため春の野に出て若菜つむわが衣手に雪はふりつつ 「光孝天皇」

◎たがためとまだ朝霜の消ぬがうへに袖ふりはへてわかなつむらん

(1106)

◎わか菜つむ我衣手も白妙に飛火の野へは淡雪ぞふる (為1269)

16 立別れいなばの山の嶺におふるまつとしきかば今かへりこむ

「中納言行平」

◎これも又わすれじ物をたちかへり因幡の山の秋の夕ぐれ (1836)

◎風ふけばさもあらぬ峯の松も憂しこひせん人はみやこにを住め

(2422)

◎わすれなん松となつげそ中々に因幡の山の峯の秋風 (2547)

△きのふかも秋の田のものにつゆおきし因幡の山も松の白雪 (1259)

17 ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなるに水くぐるとは

「在原業平朝臣」

◎たつたひめてぞめのつゆの紅に神世もきかぬ峯の色哉 (2014)

◎立田河いはねのつつじかげ見えて猶水くくる春のくれなる (2090)

◎龍田川神代も聞かでふりにけりから紅のせぜのうき浪 (3444)

△かすみたつ峯の桜の朝ぼらけ紅くくるあまのかはなみ (604)

△み吉野やたぎつ河内の春の風神世もきかぬ花ぞみなざる (1871)

△ゆふぐれは山かげすずし龍田河みどりのかげをくくる白波 (2119)

△河波のくくるも見えぬ紅をいかにちれとか峯のこがらし (2278)

18 住の江の岸による波よるさへやゆめの通路人めよく覽

「藤原敏行朝臣」

◎浪の音に宇治のさと人よるさへやねてもあやふき夢のうきはし

(988)

◎住の江の松のねたくやよる浪のよるとはなげく夢をだに見で

(1153)

◎松かげやししによる浪よる許しばしぞすむ住吉のはま (1647)

△住の江の松がねあらふ白浪にかけてよるとも見えぬ月かけ (1762)

△おどろかじ夢の枕による浪もこゑこそかはれ袖はなれにき (2784)

19 難波がたみじかきあしのふしのまもあはで此よを過してよとや

「伊勢」

◎難波なる身をつくしてのかひもなしみじかき蘆の一夜ばかりは

(2449)

△蘆の屋のかりねの床のふしまにみじかくあくる夏のよなよな

◎すみの江のなみのかよひぢたがために春は霞の人めよくらん

(為1130)

20 わびぬれば今は同じ難波なる身をつくしてもあはむとぞ思ふ

〔元良親王〕

◎身をつくしいざ身にかへてしづみみおなじ難波の浦の浪かぜ

(2524)

△せきわびぬいまはたおなじ名取河あらわれはてねせぜの埋木 (2503)

△みをつくしいかにみだれて蘆のねの難波のこともつらきふし

(3730)

21 今こむといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつるかな

〔素性法師〕

△山のはに月もまち出ぬ夜をかさね猶くものぼる五月雨のそら (1643)

△かはらずもまちいでる哉郭公月にほのめくこぞのふるごゑ (2101)

◎なが月の有明の月をみてもまづ今こんまでの秋をこそまで

(為I 621)

22 吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしと云らむ

〔文屋康秀〕

△しをるべきよもの草木もおしなべてけふよりつらき萩のうは風

(211)

◎住わぶるむべ山風のあらし山花のさかりはなをうかりけり

(為I 126)

◎神な月けふは冬とて嵐山草木もむべぞふきしほるらん (為I 803)

◎草木吹むべ山風と聞しかど猶ぞかりねの袖はしほるる (為I 1319)

23 月みれば千々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど

〔大江千里〕

◎いく秋をちぢにくだけてすぎぬらんわが身ひとつを月にうれへて

(1049)

△夕まぐれ風ふきささぶ桐の葉にそよまさらの秋にはあらねど

(748)

△思ふこと枕もしらじ秋の夜のちぢにくぐる月のさかりは (947)

△秋をへて昔はとほきおほぞらにわが身ひとつのものと月かけ (1703)

◎年をへて我身ひとつとなげきてもみれば忘るる秋のよの月

(為I 623)

24 此たびはぬさもとりあへず手向山紅葉のにしきかみのまにまに

〔菅家〕

◎たむけしてかひこそなけれ神無月紅葉はぬさとちりまがへども

(956)

◎秋萩のゆくてのにしきこれも又ぬさもとりあへぬたむけにぞ折る

(1127)

◎たつ嵐いづれの神に手向山花の錦の方もさだめず (1207)

△立田山神のみけしにたむくとやくれゆく秋のにしき織るらん (1439)

△けふよりや冬のあらしのたつた川嶺のにしきは波のまにまに (3985)

◎染もあへずしぐるるままに手向山紅葉をぬさと秋かせぞふく

(為 I 710)

25 名にしおはば相坂山のさねかつら人にしられてくるよしもがな

〔三條右大臣〕

26 をぐら山峯の紅葉は心あらば今ひとたびのみゆきまたなん

〔貞信公〕

◎み山ぢはもみぢもふかき心あれやあらしのよそにみゆきまちける

(2727)

◎声たてぬあらしもふかき心あれやみまのもみぢみゆきまちけり

(3781)

△おほるがはまれのみゆきに年へぬる紅葉の舟ぢあとはありけり

(1841)

27 みかのはらわきてながるる泉河いつ見きとてかこひしかるらむ

〔中納言兼輔〕

28 山里は冬ぞさびしさまさりける人めもくさもかれぬとおもへば

〔源宗千朝臣〕

◎春も又かれし人めにまちわびぬ草葉はしげる雨につけても

(511)

◎人目さへいとど深草かれぬとや冬待つしにも頼なくらん

(1904)

◎宿からぞみやこの内もさびしさは人目かれにし庭の月かげ

(2318)

◎ゆめぢまで人めはかれぬ草の原おきあかす霜にむすばはれつつ

(2332)

◎我宿は人目も草も草は猶かれても立てる心ながさよ

(3369)

◎庭しげき草葉の下の道たえてとはぬ人めは夏もかれけり

(4180)

△人とはぬ冬の山ぢのさびしさよかきねのそはにしとどおりあて

(759)

△しきたへの衣手かれていく日へぬ草を冬野のゆふぐれのそら

(1179)

△うたがひてうゑし梢は青葉にて人めは庭のよそにかれにき

(2661)

◎いっとてもかかる人めの山里は草の原にぞ冬はしりける

(為 I 802)

◎山里はしらぬ人めもいまさらに霜にかれゆく庭の冬草

(為 I 837)

29 心をあてにあらば心をあらむ初霜のをきまどはせるしらぎくの花

〔凡河内躬恒〕

◎心あてにわくともわかじ梅の花ちりかふさとの春のあわ雪

(1682)

△露ながら折りやおかまし菊の花しもにかれては見るほどもなし

(46)

△白菊のまがきの月の色許うつろひのこる秋のはつしも

(1767)

△ふせぐべきかたこそなけれ白菊のうつろふうへにまよふ初霜

(3683)

◎心あてに誰かはあらむ山がつかきほの萩の露のふかさを

(為 I 450)

30 有明のつれなくみえし別より暁ばかりうきものはなし

〔壬生忠岑〕

◎おほかたの月もつれなき鐘のおとに猶うらめしき在明のそら (1091)

◎おもかげもまつ夜むなしき別れにてつれなくみるありあけの空

◎ありあけのあか月よりもうかりけり星のまぎれのよひの別は (2500) (2419)

△ちる花のつれなく見えしなごりとてくるをもをしくかすむ山かけ

△花の香もかすみてしたふありあけをつれなく見えてかへるかりがね (1318) (2051)

△まどろまではかなき夢の見えしより春の夜ばかりうき物はなし (3326)

31 朝朗有明の月と見るまでに芳野の里にふれるしら雪 [坂上是則]

◎み空ゆく月もまちかし葦垣の吉野の里の雪のあさけに (2354)

△み吉野のみゆきふりしく里からは時しもわかぬありあけの空 (2022)

◎さらでだにそれかとまがふ山のは有明の月にふれる白雪

(為1898)

32 山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

[春道列樹]

◎木の葉もて風のかけたるしがらみにさてもよどまぬ秋のくれ哉

(1355)

33 久堅のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ [紀友則]

◎いかにしてしづ心なく散花ののどけき春の色と見ゆらむ (212)

△ながめわびぬひかりのどかにかすむ日に花咲山は西をわかねど

(811)

34 誰をかもしるにせむ高砂の松もむかしのともならなくに [藤原興風]

35 人はいさこころもしらず故郷ははなぞむかしのかに勾ひける

[紀貫之]

△花の香も風こそよみにさそふらめ心もしらぬふるさとの春 (1017)

36 夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづくに月やどるらむ

[清原深養父]

◎夏の月はまだよひのまとながめつつ寝るやかはべのしののめのそら (1033)

◎山ちゆく雲のいづこの旅枕ふすほどもなき月ぞあけゆく (1177)

◎よひながら雲のいづことをしまれし月をながしと恋つつぞぬる

(2432)

△猶しばしさてやは明けむ夏のよのいはこす浪に月はやどりて (127)

△折しもあれ雲のいづらにいる月の空さへをしきののめの途 (1532)

△夏の夜はうき暁の雲もなし心のそこに月はのこりて (2822)

◎卯花のまがきは雲のいづくとてあけぬる月の影やどすらん

(為1303)

37 白露に風のふきしく秋のはつらぬきとめぬ玉ぞちりける

〔文屋朝康〕

◎手づくりやさらすかきねの朝露をつらぬきとめぬ玉河の里 (1292)

△武蔵野につらぬきとめぬ白露の草はみながら月ぞこぼるる (3600)

△萩がこふ野べのかりほのさむしろに玉かにしきか風ぞふきしく

(3786)

38 忘らるる身をば思はずちかひてし人のいのちのおしくもあるかな

〔石近〕

◎うつるなりよしさてさらばながらへよさのみあだなる君が名もをし

(269)

◎身をすてて人のいのちををしむともありし誓のおぼえやはせん

(1978)

◎ちかひてし人の命を嘆くとてわがたのまぬになしてこそみれ

(為1984)

39 浅茅生のをのしのはら忍れどあまりてなどか人のこひしき

〔参議等〕

◎霜うづむをのしのはらしのぶとてしばしもおかぬ秋のかたみを

(1661)

◎なほざりのをのあさちにおく露も草葉にあまる秋の夕ぐれ (2146)

△ゆふぐれはをのしのはらしのばれぬ秋きにけりとうづらなく也 (1038)

△あさちふのをのしのはら打なびきをちかた人に秋風ぞふく (2272)

△あさちふの小野の白露そでの上にあまる涙のふかさくらべよ (3680)

40 しのぶれど色に出にけり我恋は物や思と人の問迄 〔平兼盛〕

41 恋すてふ我名はまだき立にけり人しれずこそ思ひ初しか 〔壬生忠見〕

42 契きなかたみに袖をしぼりつつ末の松山なみこさじとは 〔清原元輔〕

◎思いでよ末の松山すゑまでも浪こさじとは契らざりきや (78)

△浪こさむ袖とはかねて思ひにき末の松山たづね見しより (275)

△ちぎりきなこれをなごりの月のころなぐさむ夢もたえて見じとは

(2560)

△末の松まつ夜はあけてかはるともこそすてふ浪のこゑし立ずは (2876)

43 あひ見ての後の心にくらぶればむかしは物をおもはざりけり

〔権中納言敦忠〕

◎あひ見てののちの心をまづ知ればつれなしとだにえこそうらみね

(573)

△思いづるのちの心にくらぶ山よそなる花の色はいろかは (1163)

44 逢事のたえてしなくは中々に人をも身をもうらみざらまし

〔中納言朝忠〕

◎うくつらき人をも身をもよし知らじただ時のまのあふこともがな

(375)

◎身をすれば人をも世をもうらみねどくちにし袖のかわく日ぞなき

(1724)

45 哀ともいふべき人はおもほえでみのいたづらになりぬべきかな

〔謙徳公〕

△あはれとも人はいはたのおのれのみ秋のみちをなみにぞ借る

(973)

46 由良のとを渡る舟人かちをたえ行衛もしらぬ恋のみちかな

〔曾禰好忠〕

△山ふかきなげ木こる男のおのれのみくるしくまどふこひの道哉

(899)

47 やへ葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えねあきは来にけり

〔惠慶法師〕

◎やへむぐらとぢける宿のかひもなしふるさとはぬ花にしあらねば

(622)

△月かけをむぐらの門にさしそへて秋こそきたれとふ人はなし (36)

△秋きぬと萩の葉風はなるなりひとこそ訪はねたそがれの空 (1427)

△やへむぐら秋のわけいる風の色をわれさきにとぞ鹿は啼なる (1533)

48 風をいたみ岩うつ波のをのれのみくだけてものおもふ比かな

〔源重之〕

◎おのれのみくだけておつる岩浪も秋吹風にこそあかはる也 (2827)

△そなれ松こずあくどくる雪折にいは打やまぬ浪のさびしさ (1665)

△吉野川岩うつ浪も世とともにさぞくだけけんしる人はなし (3548)

49 みかきもり衛士の焼火の夜はもえ^{もえて}昼は消えつつ物をこそおもへ

〔大中臣能宣〕

◎くるる夜は衛士のたく火をそれと見よ室の八島もみやこならねば

(1152)

△葦の屋に螢やまがふあまや焚く思ひもこひも夜はもえつつ (1158)

△衛士のたく煙ばかりはさもあらばあれ雲井の月の秋風の空 (3194)

△河竹の下ゆく水のうす氷ひるはきえつつ音こそなかるれ (3389)

50 君がためおしからざりし命さへながくもがなとおもひぬ^{ける}る哉

〔藤原義孝〕

△君がためのいのちをさへもをしましはさらにつらさをなげかざらまし

(73)

◎をしからぬ命もいまはながらへておなじ世をだにわかれずも哉

(2539)

51 かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを

〔藤原実方朝臣〕

◎しられじな霞のしたにこがれつつ君に伊吹のさしもしのぶと (1157)

◎秋をやく色にぞ見ゆる伊吹山もえてひさしきしたの思ひも (1245)

△色にいでうつろふ春をとまれともえやは伊吹の山吹の花 (1873)

◎さしも草さしももゆてふ春にあひてえやはいぶきの山の白雪

(為 I 908)

52 明ぬればくるものとはしりながらなをうらめしきあさばらけかな

〔藤原道信朝臣〕

△おほかたの月もつれなき鐘のおとに猶うらめしき在明のそら (1091)

△秋すぎて猶うらめしきあさばらけそらく雲も打しぐれつつ (1939)

53 嘆つつひとりぬるよの明るまはいかに久しきものとかはしる

〔右大将道綱母〕

54 わすれじの行末迄はかたければふをかぎりの命ともがな

〔儀同三司母〕

△うしみつとききだにはてじ待えずはただあけぬまの命ともがな

(286)

55 龍の糸は絶て久しくなりぬれど名こそながれてなをきこえけれ

ほとまり

〔大納言公任〕

56 あらざらむ此よの外の思出に今ひとたびのあふ事もがな

由

〔和泉式部〕

◎おのづから人も時のま思いでばそれをこの世の思いでにせん (576)

◎せめて思ふいま一たびのあふことはわたらむ川や契なるべき (3037)

57 めぐり逢て見しやそれ共分ぬまに雲がくれにし夜半の月影

哉

〔紫式部〕

△はるかなる峯の梯めぐりあひてほどは雲るの月ぞさやけき (1135)

◎めぐりあふしらぬ雲井の友とてはふる郷いでし秋の夜の月

(為 I 677)

58 ありま山いな篠原風吹ばいそよ人をわすれやはする

ゐ

〔大貳三位〕

◎もろともに猪名のささはら道たえてただふく風の音にきけとや

(77)

△みじか夜の猪名の笹原かりそめにあかせばあけぬ宿はなくとも

(1223)

△風さやぐ猪名の篠原雪降て道こそたえめおともたえぬる (2856)

△または来じ露はらふ風は篠分てひとり猪名野の八月長月 (3113)

△有馬山おろす風のさびしきに霞ふる也猪名の篠原 (3520)

59 やすらはでねなまし物をさよ更てかたぶくまでの月を見しかな

に

〔赤染衛門〕

◎ やすらはでねなまし月にわれなれて心づからの露の明ぼの (3196)

60 大江山いくのの道のとをければまだふみもみず天のはしだて

〔小式部内侍〕

△ 事つてむ人の心もあやふさにふみだにも見ぬあさむづのはし (254)

△ ふみも見ぬ幾野のよそにかへる雁かすむ波間のまつとつたへよ

(1839)

61 いにしへのならの都の八重桜けふ九重にほひぬるかな 〔伊勢大輔〕

△ くるとあくと君につかふる九重のやへさく花の陰をしぞ思ふ (4043)

62 よをこめて鳥の空音ははかる共よにあふさかの関はゆるさじ

〔清少納言〕

◎ 関の戸をとりのそらねにはかれどもありあけの月は猶ぞさしける

(668)

◎ おのれなけいそぐ関路のさよ千鳥とりのそらねも声たてぬまに

(1972)

△ 会坂のゆききにたつる鳥のねのなくなくをしきあか月ぞうき (1950)

◎ あふ坂や鳥のそらねのとも明ぬとみえてすめる月かけ

(為 I 632)

63 今はただおもひ絶なんとばかりを人づてならでいふよしもがな

〔左京大夫道雅〕

◎ わすれねよこれはかぎりぞと許の人づてならぬ思出でもうし (1086)

64 朝ばらけ宇治のかはぎりたえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

〔権中納言定頼〕

△ 夜をこめてあさたつ霧のひまひまにたえだえみゆる勢多の長橋

(590)

△ 霧はるる浜名の橋のたえだえにあらはれわたる松のしき浪 (1852)

65 恨みわびほさぬ袖だにある物を恋にくちなん名こそおしけれ 〔相模〕

△ ちつかまでたつる錦木いたづらにあはで朽なん名こそ惜けれ (70)

66 諸共に哀と思へ山桜花より外に知人もなし 〔大僧正行尊〕

△ たのむ哉その名もしらぬみ山木にしる人えたる松と杉とを (1621)

67 春のよの夢ばかりなる手枕にかひなくたたむ名こそ惜けれ

〔周防内侍〕

◎ こぞもさざただうたたねの手枕にはかなくかへる春のよの夢 (1504)

△ 思いづるちぎりのほどもみじか夜の春のまくらに夢はさめにき

(1951)

68 心にもあらで此世^{うき世}にながらへばこひしかるべきよはの月かな

〔三條院〕

△あけぬとも猶おもかげにたつた山こひしかるべき夜はのそら哉

(191)

69 あらし吹三室の山のもみぢばは龍田の川のにしきなりけり

〔能因法師〕

70 さびしさに宿を立出て詠むればいづくもおなじあきのゆふぐれ

〔良暹法師〕

◎秋よただながめすてもいでなまし此里のみの夕とおもはば (832)

◎春やあらぬやどをかことにたちいづれどいづこもおなじ霞む夜の月

(1008)

◎秋はげにいづくもおなじ夕ぐれと思ひわかでも袖はぬれけり

(為 11929)

71 夕されば門田の稲葉をとづれてあしのまろやに秋風ぞ吹

〔大納言経信〕

◎いく世ともやどはこたへず門田ふくいなばの風の秋のおとづれ

(833)

△山ざとの門田ふきこす夕風にかりいほのうへもにほふ秋萩 (1607)

72 音にきくたかしの濱のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ

〔祐子内親王家紀伊〕

△あだなみの高師の浜のそなれ松なれずはかけじわれこひめやも

(1267)

73 高砂の尾上の桜さきにけりとやまの霞たたずもあらなん

〔前中納言匡房〕

△高砂の松とみやこにことつてよ尾上の桜今さかり也 (914)

△いつしかと外山のかすみたちかへりけふあらたまる春のあけぼの

(1629)

74 うかりける人をはつせの山下^{山風よ}風はげしかれとはいのらぬ物を

〔源俊頼朝臣〕

△年もへぬいのちぎり初瀬山をのへのかねのよその夕暮 (856)

△けふこそは秋は初瀬の山おろしにすずしくひびく鐘のおと哉 (936)

75 契^おをきさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

〔藤原基俊〕

76 和田の原こぎ出てみれば久堅のくもゐにまがふ^{まよふ}奥波白波

〔法性寺入道前関白太政大臣〕

△わたのはら浪とそらとはひとつにている日をうくる山のはもなし

(1678)

77 瀬をはやみ岩にせかるる瀧川のわれてもすゑにあはむとぞおもふ

〔崇徳院〕

△瀬をはやみ岩きる浪の夜とともに玉ちるばかりくだけでぞふる

(3084)

78 淡路^海嶋かよふ千鳥のなく声に幾夜^めね覚ぬすまの関守 〔源兼昌〕

◎たびねする夢ちはたえぬ須磨の関かよふ千鳥の暁のこゑ (243)

△淡路しま千鳥とわたるこゑごとにいふかひもなくものぞかなしき

(462)

△淡路島ゆききの舟の友がほにかよひなれたるうら千鳥哉 (2016)

79 秋風^{ただよふ}にたなびく雲のたえまよりもれいづる月のかけのさやけさ

〔左京大夫頭輔〕

△いとはじよ月にたなびくうき雲の秋のけしきはそらに見えけり

(138)

80 長からむ心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそ思へ

〔侍賢門院堀河〕

△おきわびぬながき夜あかぬ黒髪の袖にこぼるる露みだれつつ (1462)

81 敦公なきつるかたをながむればただありあけの月ぞのこれる

〔後徳大寺左大臣〕

△なごりだにしばしな明けそほととぎすなきつる夜半のそらのうき雲

(219)

△袖の香を花橘におどろけばそらにありあけの月ぞのこれる (1030)

△昔見し秋やいくよの故郷にいまも在明の月ぞ残れる (3440)

△郭公なく一声のしののめに月のゆくへもあかぬ空かな (3997)

82 思ひわび扱^えもいのちはある物をうきにたへぬはなみだなりけり

〔道因法師〕

83 世中^によみちこそなければおもひ入やまのおく^{なか}にも鹿ぞなくなる

〔皇太后宮大夫俊成〕

↓5 番歌を本歌取

84 ながらへば又此比やしのばれんうしと見しよぞいまは恋しき

〔藤原清輔朝臣〕

85 よもすがら物思ふ比は明やらぬ^で闇のひまさへつれなかりけり

〔俊恵法師〕

86 嘆けとて月やは物をおもはするかこちがほなるわがなみだかな

〔西行法師〕

△もよほすもなぐさむもただ心からながむる月をなどかこつらん

(948)

↓23番歌を本歌取

87 村雨の露もまだひぬまきのはに霧たちのぼるあきのゆふぐれ

〔寂蓮法師〕

88 難波江のあしのかりねの一よゆる身をつくしてや恋わたるべき

〔皇嘉門院別当〕

◎難波なる身をつくしてのかひもなしみじかき蘆の一夜ばかりは

(2449)

△みをつくしいかにみだれて蘆のねの難波のこともつらきふし

(3730)

↓19・20番歌を本歌取

89 玉のをよ絶なば絶ねながらへば忍ぶることのよはりもぞする

〔式子内親王〕

△みだれじとかくてたえなむたまの緒よながき恨のいつかさむべき

(259)

△片糸のあふとはなしにたまのをまたえぬ許ぞ思みだるる (1079)

△思ふことむなしき夢のなかざらにたゆともたゆなつらき玉の緒

90 見せばやなをじまの蟹の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず

〔殷富門院大輔〕

△秋は又ぬれこし袖のあひにあひて雄島の海人ぞ月になれける (1132)

△わかれのみ雄島のおまの袖ぬれて又はみるめをいつか刈るべき

(2426)

91 きりぎりすなくや霜夜のさ菰に衣かたしきひとりかもねん

〔後京極撰政太政大臣〕

△吹はらふとこの山風さむしろに衣手うすし秋の月かけ (1761)

↓3番歌を本歌取

92 我袖はしほひに見えぬおきの石の人こそしらねかはくまもなし

〔二條院讃岐〕

93 世中はつねにもがもななさ漕あまのをぶねの綱手かなしも

〔鎌倉右大臣〕

△綱手引千賀のしほがまくりかへしかなしき世をぞうらみはてつる

(3712)

94 みよしのの山の秋風さよふけて故郷さむくころもうつなり

95 おほけなく浮世の民におほふ哉わがたつ袖にすみぞめの袖

〔前大僧正慈圓〕

96 花さそふあらしの庭の雪ならでふり行ものは我身なりけり

〔入道前大政大臣〕

△春をへてみゆきになるる花のかけふりゆく身をもあはれと思ふ

(2068)

97 こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつつ

〔権中納言定家〕

98 風そよぐならの小川の夕暮は御祓ぞ夏のしるしなりけり

〔従一位家隆〕

99 人もおし人も恨めしあぢきなくよをおもふゆへに物思ふ身は

〔後鳥羽院〕

100 百敷やふるき軒場のしのぶにもなをあまりあるむかし成けり

〔順徳院〕

◎古郷のおなじ軒ばの忍ぶにもあまりてにはふ春の梅がえ(為 I 1805)

附 II 百人一首総索引

《凡例》

一、本書は、島津忠夫『百人一首』（角川文庫）を底本とする総索引である。底本の使用を御許可下さった島津忠夫先生に心からお礼申し上げます。

二、底本の本文は、素庵筆と言われる古刊本（東洋文庫蔵）である。ただし本文異同も含む。その本文は附 I に掲載している。

三、本書は、百人一首の全歌を品詞に分解して、五十音順に配列したものであるが、その際、次のように処理した。

1 原則として、各単語には品詞名を注記したが、名詞については省略した。

2 品詞に分ち難いものは、連語として処理した。枕詞の場合も同様である。掛詞の場合は、両方の語で引けるようにした。

3 活用のある語は終止形で項目を立て、活用の種類を記し、活用の順に配列した。活用形はそれぞれ略記号を用いて表記した。（例 終）

4 語の所在の指示は、歌番号（算用数字）で表記し、用例数が二つ以上ある場合に限り漢数字で示した。（例 29 二）

5 表記上区別しにくい単語は、適宜漢字或いはひらがなを「」に よって施した。

6 参考とすべき関連語のある場合には、↓によって例記した。仮名遣いの相違も同様である。

7 () のついた語は、項目にないことを示す。

四、なお本索引は、昭和五十七年九月に作成した私家版『百人一首総索引』(影月堂文庫)の訂正版である。

《索引》

あ

暁「あかつき」 30
秋 1・5・22・23・37・47・70・75・87
↓秋風・(秋の田・秋の野・秋の夕暮)
秋風 71・79・94
明「あく」〈下二〉
あけ【用】 36・52・85
あくる【体】 53
↓(明やる)
浅茅生「あさぢふ」 39
朝朗「あさぼらけ」 31・52・64
あし【蘆】 19・71・88
足引の〈枕詞〉 3
網代木「あじろぎ」 64
あだ波 72
あぢきなし〈形ク〉

あぢきなく【用】 99

淡路潟 (78)

淡路島 78

哀「あはれ」〈感動〉 45・66・75

あひ見る〈上二〉

あひ見【用】 43

逢ふ〈四段〉

あは【未】 19・20・77

あひ【用】 57

あふ【体】 44・56

↓あひ見る・相坂・相坂山・めぐり逢ふ

あふ「敢ふ」〈下二〉

あへ【未】 24・32

↓とりあふ

相坂「あふさか」 10・62

↓(相坂の関・相坂山

相坂山 25

あま【蟹】 11・90・93

天「あま」 2・7・12・60

↓(あまつ風)・あまのかぐ山・天のはしだて・天の原

あまのかぐ山 2

天のはしだて 60

天の原 7

あまり 100

あまる〈四段〉

あまり【用】 39

(雨) ↓村雨

あら【荒】〈形語幹〉 1

あらし【嵐】 22・69・96

あらはる〈下二〉

あらはれ【用】 64

↓(あらはれわたる)

あり〈助動〉

あら【未】 23・26・56・68・73

ある【体】 38・65・82・100

有明 21・30・31・81

↓(有明の月)

ありま山【有馬山】 58

い

いかに〈副詞〉 53

いく〈四段〉

いく【体】 60

↓ゆく

いくの【生野】 60

幾夜 78

いさ〈形語幹〉 35

石 92

いた〈形語幹〉 48

いたづらなり〈形動〉

いたづらに【用】 9・45

いつ 27

いづ【出づ】〈下二〉

いで【用】 7・11・15・21・40・70・76

いづる【体】 (21)・79

↓うち出・こぎいづ・たちいづ・まちいづ・もれいづ

いづく 36・70

(いづこ) 36・70

泉河 27

いで〈副詞〉 58

糸 55

いな ↓あな

いなば【因幡】 16

稲葉 71

いにしへ 61

↓むかし

いぬへナ変

いな【未】 16

いぬ【終】 75

命 38・50・54・75・82

↓玉のを

いのる【祈る】〈四段〉

いのら【未】 74

岩 48・77

いふ【言ふ】〈四段〉

いひ【用】 21

いふ【終】 8・22・45

いふ【体】 51・63

↓てふ

いぶき【伊吹】 51

庵【いは】 1・8

↓(かりほの庵・我庵)

今 63・84

今【副詞】 16・20・21・26・56

入【いる】〈四段〉

いる【体】 83

↓おもひ入

色 9・40・90

↓(紅・黒・白)

う

浮世 (68)・95

うし【憂し】〈形ク〉

う【語幹】 8

うかり【用】 74

うし【終】 84

うき【体】 30・82

↓うき世・うぎ山

宇治 64

↓うし・うぎ山

うち出〈下二〉

うちいで【用】 4

うぎ山【宇治山】 8

うつ【打つ】〈四段〉

うつ【終】 94

うつ【体】 48

うつる〈四段〉

うつり【用】 9

浦 4・97

↓(田子の浦・まつほの浦)

恨む〈上二〉

うらみ【未】 44

うらみ【用】 65

↓(うらみわぶ)

恨めし〈形シク〉

うらめし【終】 99

うらめしき【体】 52

え

(江) ↓大江山・住の江・難波江

え〈副詞〉 51

お

お ↓を

おがは ↓をがは

奥【おき】 76・92

↓(おきつしらなみ・おきの石)

おきまどはす〈四段〉

おきまどはせ【已】 29

おく 83

おく〈四段〉

おき【用】 75

おく【体】 6

↓(おきまどはす・契りおく)

おくやま【奥山】 5

おぐら山 ↓をぐら山

おし ↓をし

おじま ↓をじま

落【おつ】〈上二〉

おつる【体】 13

音 (55)・72

↓空音

おとづる〈下二〉

おとづれ【用】 71

おとめ ↓をとめ

同じ〈形シク〉

おなじ【終】 20

おなじ【体】 70

おの ↓をの

おのれ ↓をのれ

おふ【負ふ】〈四段〉

おは【未】 25

おふ【生ふ】〈上二〉

おふる【体】 16

大江山 60

おほけなし〈形ク〉

おほけなく【用】 95

おほふ〈四段〉

おほふ【終】 95

思ひ 51

↓火

おもひ入〈四段〉

おもひいる【体】 83

思ひ初〈下二〉

おもひそめ【用】 41

おもひ絶ゆ〈下二〉

おもひたえ【用】 63

思出「おもひで」 56

思ひわぶ〈上二〉

おもひわび【用】 82

思ふ〈四段〉

おもは【未】 38・43・86

おもひ【用】 50

おもふ【体】 20・40・48・77・99

おもへ【已】 28・49・80

おもへ【命】 66

↓思ひ・おもひ入・思ひ初・おもひ絶ゆ・思出・思ひわぶ・物思ふ

おもほゆ〈下二〉

おもほえ【未】 45

おる ↓をる

か

か【香】 35

か〈助詞〉 3・27・34・39・53・91

が〈助詞〉 1・8・9・15・23・40・41・50・75・86・92・95・96

かぎり【限り】 54

かく〈副詞〉 51

かく〈下二〉

かけ【未】 72

かけ【用】 11・32

(かぐ山) ↓あまのかぐ山

かけ【影】 79

↓月影

かこちがほ 86

かささぎ【鶺鴒】 6

春日 7

霞 73

風 12・32・37・48・58・98

↓秋風・(あまつ風)・山風

かた「方」 81

がた (78)

↓(淡路がた)・難波がた

かたし〈形ク〉

かたけれ【已】 54

かたしく〈四段〉

かたしき【用】 91

かたぶく〈四段〉

かたぶく【体】 59

かたみに〈副詞〉 42

かちを「梶緒」 46

(かづら) ↓さねかづら

門田 71

かな〈助詞〉 21・38・45・46・48・50・52・(57)・59・61・68・86・

95

(がな) ↓もがな

かなし「愛し」〈形シク〉

かなし【終】 93

悲し〈形シク〉

かなしき【体】 5

かなしけれ【已】 23

かは〈助詞〉 53

川 69

↓泉河・川霧・滝川・龍田川・(龍田の川)・みなもの川・山川・小川

かはぎり「川霧」 64

かはく「乾く」〈四段〉

かはく【体】 92

かはる「変る」〈四段〉

かはら【未】 90

かひな「腕」 67

かひなし「甲斐なし」〈形ク〉

かひなく【用】 67

帰る〈四段〉

かへり【用】 16

かへる【体】 10

(かほ) ↓かこちがほ

かみ「神」 24

↓神代

(かみ) ↓黒髪

神代 17

かも〈助詞〉 7

かも〈か+も〉 3・34・91

通路「かよひぢ」 12・18

かよふ「通ふ」〈四段〉

かよふ【体】 78

からくれなる 17

からに〈助詞〉 22

かりね「刈根・仮寝」 88

かりほ 1

かる「離る・枯る」〈下二〉

かれ【用】 28

き

(木) ↓網代木・草木・桜・まき・松

き〈助動〉

き【終】 27・42

し【体】 7・9・14・21・30・38・42・50・57・59・75・84・90

しか【已】 41

(菊) ↓白菊

きく「聞く」〈四段〉

きか【未】 16・17

きく【体】 5・72

きこゆ〈下二〉

きこえ【用】 55

岸 18

君 15・50

消ゆ〈下二〉

きえ【用】 49

霧 64・87

↓川霧

きりぎりす 91

く

来「く」〈カ変〉

こ【未】 16・21・97

き【用】 2・47

くる【体】 25

くぐる「潜る・括る」〈四段〉

くぐる【終】 17

くさ【草】 28

↓草木・さしも草

草木 22

くだく「砕く」〈下二〉

くだけ【用】 48

くつ「朽つ」〈上二〉

くち【用】 65

雲 12・36・79

↓雲がくる・くもる

雲がくる〈下二〉

くもがくれ【用】 57

くもる 76

くらぶ〈下二〉

くらぶれ【已】 43

くる「繰る」〈四段〉

くる【体】 25

くる「暮る」〈下二〉

くるる【体】 52

(黒) ↓くろかみ

くろかみ「黒髪」 80

(くれなる) ↓からくれなる

け

けさ「今朝」 80

けふ 54・61

けらし「けるらし」〈助動〉

けらし【終】 2

けり〈助動〉

けり【終】 9・32・40・41・43・47・69・73・82・85・96・(98)・

100

ける【体】 6・(13)・28・35・37・(50)・74・98
けれ【已】 55

こ

こ〈代名〉 10・19・24・56・68・84

こがる〈下二〉

こがれ【用】 97

漕ぐ〈四段〉

こぐ【体】 93

漕出「こぎいづ」〈下二〉

こぎいで【未】 11

こぎいで【用】 76

九重 61

心 26・43・68・80

↓心あて・しづ心

心あて 29

こす「越す」〈四段〉

こさ【未】 42

こそ〈助詞〉 23・41・47・49・55・65・67・72・80・83・92

事 44・56・89

↓(逢事)

ことし「今年」 75

恋 13・40・41・46・65

↓(我恋)

恋し〈形シク〉

こひしき【体】 39・84

こひしかる【体】 27・68

恋わたる〈四段〉

こひわたる【体】 88

こむ〈下二〉

こめ【用】 62

これ〈代名〉 10

比「ころ」 48・84・85

↓(この比)

衣 2・91・94

↓衣手

衣手 1・15

声 5・78

さ

さ〈副詞〉 51

さ〈接頭〉 ↓さねかづら・さむしろ・さよ

さ〈接尾〉 ↓さびしさ・さやけさ

さく「咲」〈四段〉

さき【用】 73

桜 73

↓花・八重桜・山桜

篠原「ささはら」 58

↓しのはら

さしも草 51

させも 75

さそふ「誘」〈四段〉

さそふ【体】 96

扱「さて」〈副詞〉 82

里 31

↓故郷・山里・(芳野の里)

さぬ〈下二〉

さね【用】 25

さねかづら 25

さびし〈形シク〉

さびしき【用】 47

さびしさ 28・70

さへ〈助詞〉 18・50・85

さむし〈形ク〉

さむく【用】 94

↓さ蒔

さ菰 91

さやけさ 79

さよ 59・94

(さる) ↓タさる

し

〈助詞〉 16・25・44・51

じ 〈助動〉

じ【終】 42・51・54・62・72

鹿 5・8・83

しか 〈副詞〉 8

しがらみ 33

(しく) ↓ふきしく

しげる 〈四段〉

しげれ【已】 47

しだりを 3

しづ心 33

しのはら 39

↓ささ原

しのぶ 100

しのぶ 〈四段〉

しのば【未】 84

忍ぶ 〈上二〉

しのぶ【終】 100

しのぶる【体】 89

しのぶれ【已】 39・40

しのぶもぢずり 14

しばし 〈副詞〉 12

(しほ) ↓しほひ・もしほぐさ

しほひ【潮干】 92

しほる 〈下二〉

しほるれ【已】 22

しほる 〈四段〉

しほり【用】 42

(島) ↓淡路島・八十島・をじま

しも 6

↓霜夜・初霜

霜夜 91

しらぎく 29

白露 37

白波 76

しら雪 31

知る 〈四段〉

しら【未】 10・25・35・46・51・80・92

しり【用】 52

しる【体】 10・34・53・66

知る〈下二〉

しれ【未】 41

しるし 98

(しろ) ↓しらぎく・白露・白波・しら雪・しろし・白妙

しろし〈形ク〉

しろき【体】 6

白妙 2・4

しをる ↓しほる

す

す〈サ変〉

せ【未】 9・34

す【終】 41

する【体】 58・89

すれ【已】 72

す〈助動〉

する【体】 86

ず〈助動〉

ざら【未】 44・56

ざり【用】 43・50

ず【用】 41・73

ず【終】 17・24・35・38・60・80・90

ぬ【体】 10・32・37・46・57・(60)・65・74・82・85・87・92・97

ね【已】 23・47・92

すがた 12

すぐ〈上二〉

すぎ【用】 2

過す〈四段〉

すぐし【用】 19

すま【須磨】 78

すみぞめ【墨染・住み初め】 95

住の江 18

すむ【住】〈四段〉

すみ【用】 95

すむ【体】 8

すゑ 77

↓末の松山・行末

末の松山 72

せ

瀬 77

↓瀬々

関 10・62

↓(相坂の関)・関守

関守 78

せく〈四段〉

せか【未】 77

瀬々 64

そ

そ〈代名〉 58

ぞ〈助詞〉 5・6・8・13・20・28・35・37・71・77・81・83・84・

89・90・98

袖 42・65・72・90・92・95

杣【そま】 95

そむ【初】〈下二〉

そめ【用】 14・41

そよぐ〈四段〉

そよぐ【体】 98

空音【そらね】 62

それ〈代名〉 57

た

田 1

↓(秋の田)・門田・田子・龍田・龍田川

たえだえなり〈形動〉

たえだえに【用】 64

たえて〈副詞〉 44

たえま 79

高砂 34・73

たかし【高師・高し】 72

たかね【高嶺】 4

滝 55

↓滝川

滝川 77

焼く〈四段〉

たく【体】 49

田子 4

ただ〈副詞〉 63・81

ただよふ〈四段〉

ただよふ【体】 (79)

たつ〈四段〉

たた【未】 67・73

たち【用】 63・87

たつ【体】 95

↓(立出・たちのぼる・立別れ)

龍田 69

↓龍田川・(龍田の川)

龍田川 17

たつみ「辰巳」 8

たなびく〈四段〉

たなびく【体】 79

だに〈助詞〉 51・65・90

たび「度」 24

たふ「堪・絶」〈下二〉

たへ【未】 82

↓絶ゆ

玉 37・89

↓玉のを

手枕「たまくら」 67

玉のを 89

民 95

手向山 24

ため 15・50

たゆ〈下二〉

たえ【用】 46・55・(82)・89二

↓おもひ絶

たり〈助動〉

たる【体】 32

誰「たれ」 14・34

ち

ちかふ「誓」〈四段〉

ちかひ【用】 38

契る〈四段〉

ちぎり【用】 42・75

千々なり〈形動〉

ちぎに【用】 23

千鳥 78

ちはやぶる〈枕詞〉 17

ちる〈四段〉

ちり【用】 37

ちる【終】 33

つ

つ〈助動〉

て【用】 38

つる【体】 21・81

てよ【命】 19

つ〈助動〉 12・76

月 7・21・31・36・59・68・79・81・86

↓(有明の月)・月影・長月

月影 57

つぐ「告」〈下二〉

つげよ【命】 11

つくす〈四段〉

つくし【用】 20・88

つくばね 13

つつ〈助詞〉 1・4・(10)・15・42・49・53・97

綱手 93

つねなり〈形動〉

つねに【用】 93

つむ〈四段〉

つむ【体】 15

つもる〈四段〉

つもり【用】 13

露 1・75・87

↓白露

つらぬく〈四段〉

つらぬき【用】 37

つりぶね 11

つれなし〈形ク〉

つれなかり【用】 85

つれなく【用】 30

て

(手) ↓衣手・手枕・綱手・手向山

て〈助詞〉 2・4・10・11・13・15・20・27・39・43・48・(49)・55

二・57・59・62・70・71・75・76・77・80・88・94

で〈助詞〉 19・25・45・59・63・68・(85)・96

てふ「といふ」〈連語・四段〉

てふ【体】 2・41

と

と 46

と〈助詞〉 8・11・13・16・17・19・20・21・22・28・31・40・42・

45・50・51・52・53・54・57・63・66・74・77・84

↓てふ

ど〈助詞〉 23・39・40・55・(70)

とき【時】 5

とづ〈上二〉

とちよ【命】 12

とて〈助詞〉 27・86

とどむ〈下二〉

とどめ【未】 12

とふ〈四段〉

とふ【体】 40

とほし〈形ク〉

とほけれ【已】 60

とま【苦】 1

とまる〈四段〉

とまり【用】 (55)

とむ〈下二〉

とめ【未】 37

とも【友】 34

とも〈助詞〉 62

とやま【外山】 73

鳥 62

↓かささぎ・千鳥・ほととぎす・山鳥

とりあふ〈下二〉

とをし ↓とほし

な

名 25・41・55・65・67

(菜) ↓若菜

な〈助詞〉 9・42・51・90・93

中 83 (二)・93

↓世中

長し〈形ク〉

ながから【未】 80

ながく【用】 50

長月 21

ながながし〈形シク〉

ながながし【体】 3

なかなかに〈副詞〉 44

ながむ【詠】〈下二〉

ながむれ【已】 70・81

ながめ【長雨・眺め】 9

ながら〈助詞〉 36・52

ながらふ〈下二〉

ながらへ【未】 68・84・89

ながる〈下二〉

ながれ【用】 32・55

ながるる【体】 27

(なぎ) ↓ゆふなぎ

なぎさ 93

鳴く〈四段〉

なき【用】 81
 なく【終】 83
 なく【体】 5・78・91
 なくに 14・34
 なげく〈四段〉
 なげき【用】 53
 なげけ【命】 86
 なし〈形ク〉
 なく【用】 33・44
 なし【終】 30・66・92
 なけれ【已】 83
 夏 2・36・98
 など〈副詞〉 39
 難波 20
 ↓難波江・難波がた
 難波江 88
 難波がた 19
 なほ〈副詞〉 52・55・100
 波 18・42・48
 ↓あだ波・白波
 なみだ 82・86
 なむ〈助詞〉 26・73

奈良 61
 なら 98
 なり〈助動〉
 なら【未】 14・34・63・96
 に【用】 23・75
 なり【終】 8・32・69・82・94・96・98・100
 なる【体】 7・20・67・83・86
 なる〈四段〉
 なり【用】 13・45・55
 なを ↓なほ
 なん〈助詞〉 26・73

に

に〈助詞〉 1・4・5・6・7・9・11・14・15・16・17・
 18・21・22・25・29・31・32・33・34・35・36・37・40・43・
 47・56・57・(59)・61・(62)・65・66・67・68・70・71・72・76・
 77・78・79・82・83・(87)・87・90・91・92・95・97・99・100
 にしき 24・69
 庭 96
 匂ふ〈四段〉
 にほひ【用】 35・61

ぬ

ぬ【寝】〈下二〉

ね【未】 3・91

ね【用】 59

ぬる【体】 53

↓かりね・さねかつら・ねぎめ

ぬ〈助動〉

な【未】 59・63・65・89

に【用】 2・6・9・14・40・41・47・57・73

ぬ【終】 11・28・45・78

ぬる【体】 13・36・50・61

ぬれ【已】 20・52・55

ね【命】 89

ぬさ 24

濡る〈下二〉

ぬれ【用】 1・72・90・92

ね

(ね) ↓そらね

(ね) ↓たかね・つくばね

ね覚〈下二〉

ねぎめ【未】 78

閨【ねや】 85

の

野 15・37

↓(秋の野)・いく野・(春の野)・みよしの・芳野・をの

の〈助詞〉 1四・2一・3四・4三・5・6一・7一・8・9・10

二・11二・12一・13一・14・15・16一・18三・19三・21二・22二・

23・24三・25・26一・27・29二・30・31一・32・33三・34一・35・36

二・37二・38一・39三・40・42・43一・44・45・46二・47・48・49

二・51・53・54一・55・56四・57・58・59・60三・61三・62二・64

二・67二・68一・69四・70・71一・72三・73三・74・75・76二・77・

78二・79三・80・81・83一・84・85・87三・88三・89二・90二・91・

92二・93三・94一・95二・96二・97三・98三・100

軒場 100

のこる〈四段〉

のこれ【已】 81

のち 43

のどけし〈形ク〉

のどけき【体】 33

のぼる〈四段〉

のぼる【終】 87

のみ〈助詞〉 48

は

葉 87

↓稲葉・紅葉ば

は〈助詞〉 1・4・5・8・9・10・11・15・17・23・24・28・

30・32・35・36・37・40・41・42・43・44・45・47・49・51・

52・53・54・55・58・62・63・69・72・74・80・82・84・85・

86・90・92・93・96・98・99

ば〈助詞〉 4・6・7・16・20・22・23・25・26・28・29・43・52・

54・58・60・68・70・71・76・81・84・89・

ばかり〈助詞〉 21・30・63・67

はかる〈四段〉

はかる【終】 62

はげし〈形シク〉

はげしかれ【命】 74

橋 6

↓(天の橋立)

はた〈副詞〉 20

初霜 29

はつせ 74

花 9・29・33・35・66・96

↓菊・桜

浜 72

↓(たかしの浜)

はや〈形語幹〉 77

ばや〈助詞〉 90

原 7・11・27・76

↓天の原・ささ原・しの原・みかの原・和田の原

春 2・15・33・67

↓春日・(春の野・春の日・春の夜)

ひ

日 33

火 49・51

↓思ひ

ひかり 33

久堅の〈枕詞〉 33・76

久し〈形シク〉

ひさしく【用】 55

ひさしき【体】 53

人 8・11・25・34・35・38・39・40・41・44・45・47・58・66・74・

92・97・99・

↓人づて・人め・舟人

(ひと)「一」↓ひとたび・ひとつ・ひとよ・ひとり

ひとたび 26・56

ひとつ 23

人づて 63

人め 18・28

一よ「一夜・一節」 88

ひとり 3・53・91

ひま 85

昼 49

ひる「干」↑上二

ひ【未】 87

ふ

ふ【経】↑下二

ふる【体】 9

ふきしく↑四段

ふきしく【体】 37

ふく↑四段

ふき【用】 12

ふく【体】 22・69・71

ふけ【已】 58

ふく【更】↑下二

ふけ【用】 6・59・94

ふし【節】 19

ふじ【富士】 4

淵 13

舟人 46

(舟) ↓つりぶね・舟人・をぶね

ふみ【文・踏み】 60

踏分く↑下二

ふみわけ【用】 5

冬 28

ふりさく↑下二

ふりさけ【用】 7

ふり行く【降り行く・古り行く】↑四段

ふりゆく【体】 96

降る↑四段

ふり【用】 4・15

ふる【体】 9

ふれ【已】 31

故郷 35・94

ふるし↑形ク

ふるき【体】 100

へ

べし〈助動〉

べき【体】 45・68・88

ほ

(ほ) ↓かりほ

ほか 56・66

ほす〈四段〉

ほさ【未】 65

ほす【終】 2

郭公「ほととぎす」 81

ま

ま【間】 9・19・53・57・92

↓たえま

まがふ〈四段〉

まがふ【体】 76

まき【真木】 87

(まくら) ↓手枕

まさる〈四段〉

まさり【用】 28

まし〈助動〉

まし【終】 44

まし【体】 59

また〈副詞〉 84

また〈副詞〉 36・60・87

まだき〈副詞〉 41

まちいづ〈下二〉

まちいで【用】 21

(まちいづる)【体】 21

松 16・34

↓末の松山・(高砂の松)・まつほ

待つ〈四段〉

また【未】 26

まつ【終】 16

まつ【体】 97

まつほ【松帆】 97

まで〈助詞〉 31・40・54・59

(まどはす) ↓おきまどはす

まにまに〈副詞〉 24

まよふ〈四段〉

まよふ【体】 (76)

まろや 71

み

身 9・20・23・38・44・45・88・96・97・99

↓(みをつくし・我身)

(み)〈接頭〉みかきもり・みゆき・みよしの

み〈接尾〉 1・48・77

みかきもり「御垣守」 49

三笠の山 7

みかの原 27

みじかし〈形ク〉

みじかき【体】 19

見す〈下二〉

みせ【用】 90

御敵「みそぎ」 98

みだる〈下二〉

みだれ【用】 14・80

みち 46・60・83

↓通路

陸奥「みちのく」 14

水 17

みなのか 13

峰 13・16・26

↓たかね・つくばね

三室の山 69

都 8・61

見ゆ〈下二〉

みえ【未】 47・92

みえ【用】 30

みゆき「行幸」 26

みよしの 94

見る〈上二〉

み【未】 60

み【用】 27・57・59・84

みる【体】 31

みれ【已】 4・6・7・23・76

みをつくし「澤標」 20・88

む

む〈助動〉

む【終】 12・16・20・21・63・77・80

む【体】 3・29・34・56・65・67・84・91

むかし 34・35・43・100

↓いにしへ

むぐら「葎」 47

(むしろ) ↓さむしろ

むべ〈副詞〉 22

村雨 87

め

め[目] (78)

めぐり逢ふ〈四段〉

めぐりあひ【用】 57

めり〈助動〉

めり【終】 75

も

も〈助詞〉 3・10・四・17・19・20・24・28・32・34・35・38・

(43)・44・45・46・51・57・60・66・68・70・72・73・75・77・

80・82・83・87・89・90・91・92・93・97・99・100

もがな〈助詞〉 25・50・54・56・63

もがも〈助詞〉 93

もしほ【藻塩】 97

(もぢずり) ↓しのぶもぢずり

物 23・30・40・43・48・49・52・53・80・86・96

物思ふ〈四段〉

ものおもふ【体】 85・99

ものを〈助詞〉 59・65・74・82

紅葉 5・24・32

↓紅葉ば

紅葉ば 26・69

百敷 100

もゆ〈下二〉

もえ【用】 49

もゆる【体】 51

(もり[守]) ↓関守・みかき守

もる[守る]〈四段〉

もる【体】 49

もれいづ〈下二〉

もれいづる【体】 79

諸共に〈副詞〉 66

や

や〈助詞〉 10・18・19・29・40・51・57・58・72・84・86・88・91・

97・100

やく[焼く]〈四段〉

やく【体】 97

やすらふ〈四段〉

やすらは【未】 59

八十島 11

宿 47・70

やどる〈四段〉

やどる【終】 36

八重桜 61

やへ葎 47

山 7・16・69・83・94

↓相坂山・天のかぐ山・ありま山・いなばの山・宇治山・奥山・大江

山・末の松山・手向山・外山・三笠の山・三室の山・山風・山風・

山川・山桜・山里・山鳥・小倉山

山風 74

山風 22

山川 32

山桜 66

山里 28

山鳥 3

やる〈四段〉

やら【未】 85

ゆ

雨 4・15・96

↓白雪

行〈四段〉

ゆく【体】 10・60

↓ふり行・行末・行衛

行末 54

行衛 46

(夕) ↓夕ぐれ・夕さる・夕なぎ

夕ぐれ 70・87・99

夕さる〈四段〉

ゆふされ【已】 71

夕なぎ 97

ゆへ ↓ゆゑ

夢 18・67

由良のと 46

ゆるす〈四段〉

ゆるさ【未】 62

ゆゑ 14・88・99

よ

世 8・9・19・56・68・84・99

↓浮世・(此世)・世中

夜 3・6・36・53・62・67

↓幾夜・さ夜・霜夜・ひとよ・夜半・よもすがら・よる

よ〈助詞〉 58・(74)・83・89
よく〈下二〉

よく【終】 18

よし 25・(56)・63

芳野 31

↓みよしの・(芳野の里)

よに〈副詞〉 62

世中 83・93

夜半 57・68

よはる〈四段〉

よはり【用】 89

宵 36

よもすがら 85

より〈助詞〉 13・30・66・79

夜「よる」 18・49

よる「寄る」〈四段〉

よる【体】 18

ら

(らし) ↓けらし

覧〈助動〉

らむ【終】 (8)・18・22・33

らむ【体】 27・36

らん ↓らむ

り

り〈助動〉

る【体】 6・29・31・47・81

る

る〈助動〉

れ【未】 25・84

るる【体】 38・77

わ

わ【我】 1・8・9・15・23・40・41・86・92・95・96

↓われ

若菜 15

別る〈下二〉

わかれ【用】 10

↓立別れ

別「わかれ」 30

わく「湧く・分く」〈四段〉

わき【用】 27

分く〈四段〉

わか【未】 57

(分く) ↓踏分く

忘る〈四段〉

わすら【未】 38

わする〈下二〉

わすれ【未】 54

わすれ【用】 58

わたす〈四段〉

わたせ【已】 6

わたのはら 11・76

渡る〈四段〉

わたる【終】 88

わたる【体】 46・64

わぶ〈上二〉

わび【用】 20・65

↓思ひわぶ

わる〈下二〉

われ【用】 77

我「われ」 14

ゐ

ゐな【猪名】 58

ゑ

衛士 49

を

尾 3

↓しだり尾・尾上

緒 46・89

↓かぢを・たまのを

を〈助詞〉 1・3・6・8・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44

二・46・48・49・51・54・58・59・62・63・64・65・66・67・68・69・70・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91・92・93・94・95・96・97・98・99

(78)・80・81・86・88・97・99

小川 98

をきまどはす ↓おきまどはす

をく ↓おく

をぐら山 26

をし【愛し】〈形シク〉

をし【終】 99

をし【惜し】〈形シク〉

をしから【未】 50

をしく【用】 38

をしけれ【已】 65・67

をじま【雄島】 90

をとづる ↓おとづる

をとめ【乙女】 12

をの【小野】 39

尾上 73

をのれ 48

をば【助詞】 38

をぶね 93

をる【折る】【四段】

をら【未】 29・二

ん

ん ↓む

附Ⅲ 百人一首歌出典一覧

この歌の出典は何か、またどのような書物に出ているのか。何かの必要上、緊急に調べなければならない時が、今までに一度や二度はあった。

そこで、そのような時に便利な一覧表を作成してみたことにした（歌番号は新編国歌大観に依る）。本文異同に関しても、できるだけその違いがわかるように心掛けた。こうしてみると、意外に本文が揺れていることがわかる。なお引歌等、部分的に引用されているものについては、載録の対象から除外した。

これによって、個々の歌の享受史が一望できるわけである。もちろん遺漏も少なくないであろうが、資料の多少によって、ある程度歌の流行・人気の度合がわかると思う。目安として有効に活用していただきたい。

【参考文献】

- Ⅰ 中島悦二「百人一首歌出典私考」国学院雑誌40・2・昭和9年2月
↓「小倉百人一首序説」跡見学園紀要3・昭和33年3月 ↓『小倉百人一首叙説』（新書法出版）昭和53年11月
- Ⅱ 中村薫『典拠検索名歌辞典』（明治書院）昭和11年9月 ↓（日本図書センター）昭和53年6月
- Ⅲ 有吉保「小倉百人一首の世界―その選にみる定家の文学観―」解釈と鑑賞41・8・昭和51年6月 ↓（講談社学術文庫614）昭和58年11月
- Ⅳ 井上宗雄「百人一首の選歌意識―典拠と構成―」国文学48・1・昭和58年1月

○樋口芳麻呂『定家八代抄と研究（上下）』（未刊国文資料刊行会）昭和

31年4月、32年12月

○『日本歌学大系一』別巻七』（風間書房）昭和32年3月、昭和61年10月

○『統群書類従十四上』（統群書類従完成会）昭和34年6月

○久松潜一編『歌論集（一）』（三弥井書店）昭和46年2月

○和歌史研究会編『私家集大成1』3』（明治書院）昭和48年11月、昭和50年5月

○久曾伸昇・樋口芳麻呂・藤井隆『物語和歌総覧』（風間書房）本文編、昭和49年6月 索引編、昭和51年10月

○『日本随筆大成（第一期）1』（続日本随筆大成別巻）（吉川弘文館）昭和50年3月、昭和58年6月

○『新編国歌大観一』六』（角川書店）昭和58年2月、昭和63年4月

○橋本不美男・後藤祥子『袖中抄の校本と研究』（笠間書院）昭和60年2月

○渡部清『小倉色紙伝存一覽』墨58・昭和61年1月

○名児耶明『記録にあらわれた小倉色紙一覽』五島美術館展覧会図録107（定家様）昭和62年2月

『分類略記号』 A（勅撰集）・B（私家集）・C（定家撰）・D（私撰集）・E（歌合）・F（歌論集）・G（散文等）・H（江戸随筆その他）

1 秋の田の「天智天皇」

A 後撰集302

B 柿本人丸集233「秋田刈るかりほをつくりわがをれば衣手さむし露ぞおきける」・家持集132「秋田刈るかりいほつくりわがをれば衣手さむし露ぞおきける」

C 八代抄332・自筆本近代秀歌42・秀歌体大略34・秀歌大体54・八代集秀逸・五代簡要・百人秀歌1

D 万葉集2178「秋田刈るかりいほを作りわがをれば衣手寒く露ぞ置きにける」・古今六帖1124「秋田かるかりほをみつこぎくれば衣手さむし露置きにけり」・1129「かりほすいほのとまをせみ」

E 新時代不同歌合7

F 古来風軀抄313・別本八代集秀逸18・八雲御抄69「ころもでも」・和歌童蒙抄209「かりほすいほの」・色葉和難抄巻4「秋田もるかりほをつくり我をれば衣手さむし露ぞおきける」・万葉集時代難事23・師説自見抄・ささめごと9・歌林良材抄・桐火桶34「あき田守かり庵つくり我をれば衣手寒し露ぞ置きける」・水無瀬の玉藻・定家十鉢12・溪雲問答

H 年山紀聞巻4・国家八論（正過論）・海西漫録

2 春すぎて「持統天皇」

A 新古今集175

B 家持集78「春すぎて夏ぞきぬらししうたへの衣ほしたりあまのかご山」

C 八代抄198・秀歌体大略32・百人秀歌2

D 万葉集28「夏来たるらし白妙の衣ほしたりあめの」・夫木和歌抄

8290・青葉丹花抄・万葉山常百首

F 五代集歌枕上巻「衣ほしたる天のかご山」・古来風躰抄16「夏ぞき

ぬらし白妙の衣かはかす」・詞林采葉抄・耳底記

H 年山紀聞・仙台間語第三(歌書抄)・国家八論(正過論)・海西漫録

3 足引の「柿本人丸」

A 拾遺集778

B 柿本人丸集212

C 八代抄1122・自筆本近代秀歌91・秀歌体大略97・秀歌大体93・八代集

秀逸・小倉色紙・百人秀歌3

D 万葉集2813・古今六帖924「わがひとりぬる」・和漢朗詠集238・二八要

抄

E 三十人撰8・三十六人撰8・古三十六人歌合2・時代不同歌合3

F 興義抄350・俊頼髓脳262「かもぬる」・袖中抄515・和歌童蒙抄783・和

歌色葉120・深窓秘抄74・別本八代集秀逸45・綺語抄610・歌林良材

抄・柿本朝臣人麻呂勅文46・水無瀬の玉藻・資慶卿口授

G 尤の草紙(ながき物)・鳥獸戲歌合物語33・鳥歌合5

H 年山紀聞

4 田子の浦に「山辺赤人」

A 新古今集675

C 八代抄563・秀歌大体91・小倉色紙・百人秀歌4

D 万葉集321「たこの浦ゆ・真白にぞ・雪はふりける」・夫木和歌抄

11475・青葉丹花抄・万葉山常百首

E 千五百番歌合2855判詞

F 和歌初学抄146・定家物語9「ゆきぞふりける」・五代集歌枕上巻

「ゆきぞふりける」・続歌仙落書49評

5 おくやまに「猿丸大夫」

A 古今集215

B 猿丸大夫集39「あきやまの・物はかなしき」

C 八代抄422・自筆本近秀歌47・秀歌体大略46・百人秀歌8

D 新撰万葉集113「黄葉」

E 寛平御時后宮歌合82・三十六人撰61「奥山の」・古三十六人歌合33

F 古来風躰抄246・桐火桶89

G 源平盛衰記巻48・尤の草紙(かなしき物)・のせざる草子1・神代

小町巻8

H 年山紀聞巻2

6 かささぎの「中納言家持」

A 新古今集620

B 家持集288「夜はふけにけり」

C 八代抄518・秀歌大体85・百人秀歌5

D 別本和漢兼作集7

E 古三十六人歌合14・時代不同歌合17

G 鳥獸戲歌合物語27

7 天の原「安倍仲麿」

A 古今集 406

C 八代抄 772・秀歌大体 111・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌 6

D 新撰和歌 182・古今六帖 252・和漢朗詠集 258・金玉集 51・別本和漢兼作集 548

F 興義抄 80・古来風躰抄 267・俊頼髓腦 172・和歌童蒙抄 954・深窓秘抄

79・新撰髓腦 5・井蛙抄 2・綺語抄 1・釣舟・和歌躰十種 35・五代

集歌枕上巻・万葉集時代難事 47・柿本朝臣人麻呂勸文 35・西行上人

談抄 15

G 土佐日記「青海原」・江談抄 5・今昔物語集巻 24・古本説話集第

45・宝物集 258・世継物語 79

H 仙台間語第三（振放）

8 我庵は「喜撰法師」

A 古今集 983・古今集仮名序

C 八代抄 1648・秀歌大体 107・五代簡要・百人秀歌 14

D 古今六帖 885「わが宿は・人もいふらん」

F 悦目抄 107・袋草紙 133・井蛙抄 37・歌林良材抄・和歌深秘抄・水無瀬

の玉藻・詞林拾葉・五代集歌枕上巻

G 十訓抄 18

9 花のいろは「小野小町」

A 古今集 113

B 小町集 1

C 八代抄 122・自筆本近代秀歌 33・秀歌体大略 13・八代集秀逸・五代簡

要「なげき」・小倉色紙・百人秀歌 13

D 六華和歌集 214

E 三十六人撰 62・古三十六人歌合 34・時代不同歌合 37・女房三十六人

歌合

F 別本八代集秀逸（院） 2・桐火桶 62・色葉和難抄巻 5・井蛙抄 501・

水無瀬の玉藻・定家十躰 44・詞林拾葉・西行上人談抄 5

G 神代小町巻 2・玉造物語 56

10 これやこの「蟬丸」

A 後撰集 1089「別れつつ」

B 素性集 47「ゆくもとまるも」

C 八代抄 1654「わかれつつ」・自筆本近代秀歌 109・八代集秀逸 16「わか

れつつ」・五代簡要「つつ」・小倉色紙「つつ」・百人秀歌 16「つつ」

D 別本和漢兼作集 1629「別れつつ」

E 時代不同歌合 147

F 古来風躰抄 335「とまるも」・別本八代集秀逸（隆） 25「わかれつ

つ」・歌林良材集「別れつつ」・五代集歌枕下巻

G 源平盛衰記巻 45・朝顔の露 26・小をとこ 3・十本扇 2「別れつつ」

11 わたのはら八十嶋「参議室」

A 古今集 407

C 八代抄 780・五代簡要・百人秀歌 7

D 新撰和歌 186・金玉集 56・和漢朗詠集 648・別本和漢兼作集 233

E 時代不同歌合19

F 和歌童蒙抄265・和歌舂十種20「こぎでぬと」・古来風舂抄268・深窓秘抄80・別本八代集秀逸(隆)6・新撰髓脳6・袖中抄919・井蛙抄99・和歌題林抄・和歌色葉307・定家十舂223・色葉和難抄卷3
G 今昔物語集卷24・水鏡3「こぎ出ぬ人にはかたれ」・宝物集200・撰集抄卷8・世継物語80

H 橘窓自語

12 あまつ風「僧正遍昭」

A 古今集872

B 遍昭集10

C 八代抄1455・自筆本近代秀歌104・五代簡要・百人秀歌15

D 新撰和歌217・古今六帖441・和漢朗詠集718・継色紙集25

F 古来風舂抄287・綺語抄314・和歌題林抄・色葉和難抄卷3・水無瀬の

玉藻

13 つくばねの「陽成院」

A 後撰集776「なりける」

C 八代抄964「なりける」・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌12「なりける」

る

D 古今六帖1549「恋ぞたまりて・なりける」・二八要抄「恋や・成け

ん」・連歌良材

G 雉岡隨筆下巻(百人一首水無の川のうた)

14 陸奥の「河原左大臣」

A 古今集724「乱れむと思ふ」

B 西本願寺本業平集62

C 八代抄854「みだれんとおもふ」・五代簡要「みだれんとおもふ」・百人秀歌17「乱れんと思ふ」

D 古今六帖3312・二八要抄「みだれんと思ふ」

E 千五百番歌合2539判詞

F 俊頼髓脳287・古来風舂抄280・袖中抄209、916「みだれむとおもふ」・和歌童蒙抄474・綺語抄513・歌林良材抄「みだれんと思ふ」・和歌初

学抄12「みだれむとおもふ」・五代集歌枕下巻「みだれんとおも

ふ」・色葉和難抄卷9

G 伊勢物語初段・玉造小町27・火をけの草子10

15 君がため春「光孝天皇」

A 古今集21

B 仁和御集1

C 八代抄19・秀歌体大略2・秀歌大体11・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌18

D 新撰和歌29・古今六帖45・新撰朗詠集32・別本和漢兼作集43

E 新時代不同歌合43

F 別本八代集秀逸(隆)1・和歌題林抄・定家十舂161・東野州聞書144

16 立別れ「中納言行平」

A 古今集365

C 八代抄730・自筆本近代秀歌63・秀歌体大略72・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌9

D 新撰和歌18「たちかへり」・古今六帖1275「とくかへりこん」

E 時代不同歌合25

F 古来風躰抄264・桐火桶141・井蛙抄312・歌林良材抄・和歌初学抄69・

定家十鉢154・耳底記・五代集歌枕上巻

G 尤の草紙(かへるもの)・松風村雨10

H 仙台間語第三(歌書抄)

17 ちはやぶる「在原業平」

A 古今集294

B 業平集18・尾形切「しらず」

C 八代抄465・秀歌体大略52・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌10

E 千五百番歌合2512判詞

F 古来風躰抄257・顕註密勘・桐火桶109・和歌初学抄91・和歌童蒙抄

693・水無瀬の玉藻・五代集歌枕下巻

G 伊勢物語106段

H 仙台間語第三(俊成貴船川歌)

18 住の江の「藤原敏行朝臣」

A 古今集559

B 御所本敏行集14「すみよしの」

C 八代抄1219・自筆本近代秀歌93「すみよしの」・五代簡要・百人秀歌

11

D 古今六帖2033「すみよしの」・二八要抄

E 寛平御時后宮歌合39

F 耳底記・水無瀬の玉藻

19 難波がた「伊勢」

A 新古今集1049

B 伊勢集429「ふしごとに」

C 八代抄909・自筆本近代秀歌74・秀歌体大略85・百人秀歌19

D 二八要抄

20 わびぬれば「元良親王」

A 後撰集960・拾遺集766

B 元良親王集120

C 八代抄1205・自筆本近代秀歌92・秀歌体大略98・八代集秀逸・五代簡

要・百人秀歌20

D 古今六帖1960・拾遺抄317・九品和歌・二八要抄

E 時代不同歌合65・千五百番歌合2673判詞

F 古来風躰抄330・袖中抄934・別本八代集秀逸(院)36、(隆)40・三

五記1・師説自見抄・ささめごと11・定家十鉢1・五代集歌枕下巻

21 今こむと「素性法師」

A 古今集691

B 素性集24

C 八代抄1105・自筆本近代秀歌89・秀歌体大略95・五代簡要・百人秀歌

22

D 古今六帖2827・和漢朗詠集789・金玉集44「ぬるかな」・二八要抄

E 三十人撰50・三十八人撰53・前十五番歌合3・古三十八人歌合27・

時代不同歌合71・千五百番歌合2405判詞

F 俊頼髓腦35・深窓秘抄65・和歌十鉢8・和歌鉢十種17・悦目抄40・

興義抄112・古来風鉢抄279・頭註密勘・和歌秘伝抄・井蛙抄96・和歌

色葉56・和歌童蒙抄870・和歌大綱7・定家十鉢31・和歌手習口伝・

和歌用意条々15

22 吹からに「文屋康秀」

A 古今集249・古今集仮名序「のべの」

C 八代抄410・秀歌体大略44・五代簡要・百人秀歌27

D 新撰万葉372「打吹に」・古今六帖431「なべて草木の」

E 後六々撰136「野べの」・新時代不同歌合26

F 和歌九品下上13・悦目抄9「のべの」・興義抄99・和歌秘伝抄・耳

底記・和歌用意条々29

H 仙仙問語第三（康秀風吹歌）・三養雜記卷一（字謎）・翁草

23 月みれば「大江千里」

A 古今集193

C 八代抄306・自筆本近代秀歌38・秀歌体大略27・五代簡要・百人秀歌

30

D 古今六帖301・別本和漢兼作集554

E 是貞親王歌合62・時代不同歌合127・後六々撰101

F 古来風鉢抄245・別本八代集秀逸3・桐火桶80・歌林良材抄・定家十

鉢214・溪雲問答・西行上人談抄10

24 此たびは「菅家」

A 古今集420

C 八代抄806・秀歌体大略75・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人

秀歌23

D 新撰和歌192・古今六帖2401

F 和歌鉢十種34・古来風鉢抄270・別本八代集秀逸5・綺語抄211・竹園

抄62・和歌題林抄・定家十鉢66・五代集歌枕上巻

H 卯花園漫録

25 名にしおはば「三条右大臣」

A 後撰集700

B 三条右大臣集18

C 八代抄1108・五代簡要・百人秀歌35

D 古今六帖3888・二八要抄

E 新時代不同歌合62・前撰政治家歌合376判詞

F 五代集歌枕上巻・水無瀬の玉藻・耳底記

G 雑岡隨筆下巻（さねかづらのうた）

26 をぐら山「貞信公」

A 拾遺集1128

C 八代抄482・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌34

D 拾遺抄415「もみぢも」

F 五代集歌枕上巻「紅葉し」・万葉集時代難事6「もみぢし」・六百番

陳状 41

G 大和物語99段「紅葉し」・大鏡道長「紅葉の色も」・古今著聞集卷

14・尤の草紙(まつもの)

27 みかのほら「中納言兼輔」

A 新古今集996

C 八代抄913・百人秀歌36

D 古今六帖1572・二八要抄・別本和漢兼作集30

E 古三十六人歌合39・時代不同歌合95

F 和歌童蒙抄第三「わけて・いつときけば君が恋しき」・和歌初学

抄231・八雲口伝・三五記227・詠歌一鉢47

28 山里は「源宗于朝臣」

A 古今集315

B 宗于集15

C 八代抄508・五代簡要・百人秀歌21

D 古今六帖983、3570「わびしさ」・和漢朗詠集564

E 三十六人撰97・古三十六人歌合68・新時代不同歌合56

F 桐火桶117・和歌用意条々31

G 尤の草紙(さびしき物)

H 海人のくくつ

29 心あてに「凡河内躬恒」

A 古今集277

B 内閣文庫本躬恒集151

C 八代抄435・秀歌体大略48・五代簡要・百人秀歌25

D 新撰和歌100・古今六帖3744・和漢朗詠集273・金玉集32・別本和漢兼作集420・和漢兼作集786

E 三十人撰28・三十六人撰28

F 和歌鉢十種38・深窓秘抄55・古来風鉢抄252・和歌題林抄

30 有明の「壬生忠岑」

A 古今集625

B 忠岑集154

C 八代抄1070・自筆本近代秀歌86・秀歌体大略93・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌24

D 古今六帖362・新撰朗詠集393・二八要抄

E 古三十六人歌合54・時代不同歌合119・陽成院一親王姫君達歌合6

F 顯註密勘・奥義抄513・別本八代集秀逸7・三五記3・師説自見抄・

耕雲口伝・竹園抄46、64・歌林良材抄・水無瀬の玉藻・色葉和難抄・定家十鉢6・初学一葉・溪雲問答・西行上人談抄20

G 古今著聞集卷5・尤の草紙(かなしき物)・筆のすさび巻4

H 一時隨筆

31 朝朗有明「坂上是則」

A 古今集332

B 是則集22「よしのの山に」

C 八代抄558・自筆本近代秀歌54・秀歌体大略63・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌29

D 古今六帖731「山に」・題林愚抄5725

E 古三十六人歌合86・時代不同歌合135

F 五代集歌枕上巻

32 山川に「春道列樹」

A 古今集303

C 八代抄467・秀歌体大略53・五代簡要・百人秀歌32

D 新撰和歌90「やらぬ」・古今六帖1636

F 袖中抄826・歌林良材抄

33 久堅の「紀友則」

A 古今集84

B 友則集6

C 八代抄150・自筆本近代秀歌34・秀歌体大略15・秀歌大体24・五代簡要・百人秀歌26

D 古今六帖4033「光さやけき」、4196「光さやけき」

F 綺語抄4

H 北窓瑣談後編

34 誰をかも「藤原興風」

A 古今集909

B 興風集52

C 八代抄1696・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌31

D 新撰和歌205・古今六帖4111・和漢朗詠集740

E 三十人撰78・三十六人撰108・古三十六人歌合80・新時代不同歌合69

F 古来風躰抄290

G 源氏物語奥入松風巻

35 人はいさ「紀貫之」

A 古今集42

B 貫之集814「故郷の」

C 八代抄53・秀歌体大略5・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌28

F 和歌手習口伝

G 平家物語延慶本巻三「ふるさとの・昔にかはらざりける」・源平盛

衰記巻10

H 北窓瑣談後編

36 夏の夜は「清原深養父」

A 古今集166

B 深養父集11

C 八代抄252・自筆本近代秀歌35「いづこ」・五代簡要・小倉色紙「いづこ」・百人秀歌33

D 新撰和歌159「かくるらん」・古今六帖289「夏の夜の」・新撰朗詠集145

「残るらむ」・継色紙集5「あけにけり」

E 時代不同歌合139・後六々撰78「夏の夜の」

F 古来風躰抄241「明けにけり・いづこ」・桐火桶71・井蛙抄144・和歌

秘伝抄・戴恩記・和歌用意条々9

37 白露に「文屋朝康」

A 後撰集308

C 八代抄467・自筆本近代秀歌43・秀歌体大略35・八代集秀逸・五代簡

要・百人秀歌38

D 新撰万葉87

E 寛平御時后宮歌合90

F 井蛙抄185

38 忘らるる「右近」

A 拾遺集870

C 八代抄1419・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌39

D 古今六帖2967(貫之)・拾遺抄31・二八要抄・六華和歌集1130

E 時代不同歌合173・女房三十六人歌合

F 徹書記物語21

G 大和物語84段・源氏物語奥入明石巻

H 寒築瓊綴

39 浅茅生の「参議等」

A 後撰集577

C 八代抄869・自筆本近代秀歌71・秀歌体大略82・八代集秀逸・五代簡

要・小倉色紙・百人秀歌37

D 二八要抄・六華和歌集1445

E 時代不同歌合121

F 別本八代集秀逸(院)30・井蛙抄114・369・五代集歌枕上巻

40 しのぶれど「平兼盛」

A 拾遺集622

B 兼盛集102

C 八代抄885・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌41

D 拾遺抄229・新撰朗詠集737・二八要抄

E 天徳歌合41・古三十六人歌合105・時代不同歌合197

F 古来風躰抄375・袋草紙65、310・俊頼髓腦177「見る人ぞ問ふ」、178・

奥義抄138・三五記200・和歌童蒙抄874・詠歌一躰20・和歌題林抄

G 沙石集巻五末「つつめども」・平家物語葵前・源平盛衰記・閑吟

集・尤の草紙(あらはるるもの)・李娃物語1・和歌徳「つつめど

も」・和歌紀聞「つつめども」

41 恋すてふ「壬生忠見」

A 拾遺集621

C 八代抄884・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌42

D 拾遺抄228・二八要抄

E 天徳歌合40・古三十六人歌合100・新時代不同歌合87

F 古来風躰抄374・袋草紙309・和歌童蒙抄873・耳底記

G 沙石集巻五末・閑吟集・和歌徳・和歌紀聞

42 契きな「清原元輔」

A 後拾遺集770

B 元輔集218

C 八代抄1316・自筆本近代秀歌95・秀歌体大略102・八代集秀逸・五代簡

要・小倉色紙・百人秀歌45

D 二八要抄

E 古三十六人歌合82・時代不同歌合217

F 古来風林抄488「ぬらしつつ」・袖中抄900・歌林良材抄・五代集歌枕

上巻

43 あひ見ての「権中納言敦忠」

A 拾遺集710

B 敦忠集143「ものも」

C 八代抄1073「物も」・五代簡要「ものも」・小倉色紙「物も」・百人秀歌40「物も」

D 古今六帖2598・拾遺抄257・二八要抄・六華和歌集1123

E 三十人撰61・三十六人撰72「ものも」

F 深窓秘抄70「ものも」

G 尤の草紙（をかしきもの）・うすゆき物語・四十二のものあらそひ
30、72

44 逢事の「中納言朝忠」

A 拾遺集678

B 朝忠集45

C 八代抄1117・五代簡要・百人秀歌44

D 拾遺抄235・金玉集45・二八要抄

E 天徳歌合38・三十人撰56・三十六人撰70・前十五番歌合12・古三十

六人歌合41・郁芳門院根合18判詞・千五百番歌合2567判詞

F 袋草紙602・深窓秘抄69

45 哀とも「謙徳公」

A 拾遺集950

B 一条摂政御集1

C 八代抄1408・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌43

D 拾遺抄343「人も」・二八要抄

E 時代不同歌合187

46 由良の戸を「曾根好忠」

A 新古今集1071

B 好忠集410

C 八代抄967・自筆本近代秀歌78・小倉色紙・百人秀歌47

F 師説自見抄

G 住吉物語222

H 年山紀聞巻5・北窓瑣談後編

47 やへ葎「恵慶法師」

A 拾遺集140

B 恵慶集109

C 八代抄274・自筆本近代秀歌36・秀歌体大略24・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌52

D 拾遺抄89・玄々集34

E 後十五番歌合24・時代不同歌合243・後六々撰24「とはね」・相撲立詩歌合27

F 別本八代集秀逸41・和歌題林抄

G 源氏物語奥入桐壺卷

48 風をいたみ「源重之」

A 詞花集211

B 重之集303・伊勢集303「風ふけば」

C 八代抄966・八代集秀逸・百人秀歌46

D 玄々集30

E 三十人撰75・三十六人撰93・古三十六人歌合65・時代不同歌合225

F 深窓秘抄73・初撰本古来風躰抄550・玄々集・別本八代集秀逸（隆）

107

49 みかきもり「大中臣能宣」

A 詞花集225

C 八代抄1010・八代集秀逸（長能）・小倉色紙・百人秀歌48

D 古今六帖781「君がもる・ひるはたえよるはもえつつ」・後葉和歌集

204「みかきもる」・二八要抄「みかきもる」・題林愚抄8050

E 古三十六人歌合98・時代不同歌合213

F 別本八代集秀逸（院）111・和歌色葉29「みかきもる」・色葉和難抄

卷9

50 君がためおし「藤原義孝」

A 後拾遺集669

B 義孝集12「おもほゆるかな」

C 八代抄1050・五代簡要・小倉色紙「おもひぬるかな」・百人秀歌49

D 二八要抄「おもひぬるかな」・別本和漢兼作集431

E 後六々撰117・新時代不同歌合128

51 かくとだに「藤原実方朝臣」

A 後拾遺集612

B 実方集121

C 八代抄849・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌50

D 二八要抄・六華和歌集1493

F 古来風躰抄452・奥義抄221・袖中抄81・詠歌一躰53・和歌色葉387・綺

語抄666「おもふころを」・三五記233「思ひは」・色葉和難抄卷7

H 仙台間語第三（吉野国栖）

52 明ぬれば「藤原道信朝臣」

A 後拾遺集672

B 道信集3「かへるものとは」

C 八代抄1046・八代集秀逸・五代簡要・百人秀歌51

D 二八要抄

E 時代不同歌合275・後六々撰72

53 歎つつ「右大將道綱母」

A 拾遺集912

C 八代抄1087・五代簡要・百人秀歌56

D 拾遺抄268・玄々集13・二八要抄

E 前十五番歌合23・時代不同歌合205・女三十六人撰

F 深窓秘抄「うらみつ」・古来風躰抄378

G 蜻蛉日記27・大鏡兼家55・尤の草紙（をそき物）

54 わすれじの「儀同三司母」

A 新古今集 1149

C 八代抄 1094・八代集秀逸・小倉色紙・百人秀歌 55

D 二八要抄

E 前十五番歌合 24・時代不同歌合 233・女房三十六人歌合

F 別本八代集秀逸(院) 154・井蛙抄 191

55 滝の糸は「大納言公任」

A 拾遺集 449「糸」・千載集 1035「音」

B 公任集 119

C 百人秀歌 59

G 権記長保元年九月十二日条

H 河社

56 あらざらむ「和泉式部」

A 後拾遺集 763

B 和泉式部集 744

C 八代抄 1387・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌 61

D 二八要抄

F 古来風跡抄 466

57 めぐり逢て「紫式部」

A 新古今集 1499「月かげ」

B 紫式部集 1「月かげ」

C 八代抄 1617「月かげ」・百人秀歌 64「月かな」

E 女房三十六人歌合

G 朝顔の露 28「月かげ」

58 ありま山「大式三位」

A 後拾遺集 709

C 八代抄 1402・五代簡要・百人秀歌 62

D 二八要抄

E 新時代不同歌合 231・女房三十六人歌合

F 五代集歌枕上巻

G 雉岡隨筆下巻(有馬山のうた)

59 やすらはで「赤染衛門」

A 後拾遺集 680

B 赤染衛門集 4・馬内侍集 162

C 八代抄 1079・五代簡要「みるかな」・小倉色紙・百人秀歌 63

D 二八要抄

E (時代不同歌合)

F 古来風跡抄(馬内侍) 458・袋草紙 174

60 大江山「小式部内侍」

A 金葉集 550(三奏本 543)「ふみもまだみず」

C 八代抄 1656・八代集秀逸・小倉色紙・百人秀歌 66

D 梁塵秘抄

E 時代不同歌合 174・女房三十六人歌合

F 俊頼髓腦「さとの・ふみもまだみず」・袋草紙 6・頭註密勘・和歌

初学抄197

G古今著聞集巻5・十訓抄・長門本平家物語巻7・無名草子83・和泉式部の物語9・小式部15・別本小式部4・十本扇1、12

61 いにしへの「伊勢大輔」

A詞花集29・三奏本金葉集58

B伊勢大輔集14

C八代抄134・八代集秀逸・小倉色紙・百人秀歌65

D玄々集159・新撰朗詠集484・御裳濯和歌集119

E後十五番歌合16・後六々撰45・新時代不同歌合211・中占三十六歌仙

伝・女房三十六人歌合・相撲立詩歌合23

F袋草紙159・別本八代集秀逸100

G古本説話集第九・長門本平家物語巻20・源平盛衰記巻48・草木太平

記7・世継物語24

62 よをこめて「清少納言」

A後拾遺集939「そらねに」

C八代抄1655「そらねにはかる」・五代簡要・百人秀歌60「そらねに」

E後六々撰145・新時代不同歌合147

F初撰本古来風躰抄482「そらねにはかる」・続歌林良材抄

G枕草子「そらねにはかる」・宝物集第45巻・尤の草紙（にたる物）

63 今はただ「左京大夫道雅」

A後拾遺集750

C八代抄1112・八代集秀逸・五代簡要・百人秀歌68

D二八要抄

E後六々撰92・千五百番歌合2579判詞

F別本八代集秀逸（院）73

G十訓抄82

64 朝ほらけ宇治「権中納言定頼」

A千載集420

B尊経閣本四条中納言定頼集454

C八代抄390・百人秀歌67

D続詞花和歌集290・別本和漢兼作集43・和漢兼作集734

E新時代不同歌合163

65 恨みわび「相模」

A後拾遺集815

C八代抄1335・八代集秀逸・五代簡要・百人秀歌75

D新撰朗詠集738・二八要抄

E後冷泉院根合9・時代不同歌合162・後六々撰20・女房三十六人歌

合・顯輔家歌合56判詞

F古来風躰抄471

G栄花物語巻36

66 諸共に「大僧正行尊」

A金葉集521（三奏本512）

B行尊大僧正集109「しれる人なし」

C八代抄1512・八代集秀逸・百人秀歌71

E 時代不同歌合 274

G 今鏡第 8・草木太平記 3

67 春のよの「周防内侍」

A 千載集 964

B 周防集 7

C 八代抄 955・百人秀歌 69

E 新時代不同歌合 223・女房三十六人歌合

F 水無瀬の玉藻

68 心にも「三条院」

A 後拾遺集 860

C 八代抄 1606・五代簡要・百人秀歌 54「うき世」

E 新時代不同歌合 176「このよに」

F 古来風躰抄 476・袋草紙 189「このよに」・別本八代集秀逸（隆） 67

G 栄花物語巻 12

69 あらし吹「能因法師」

A 後拾遺集 366

B 書陵部本能因法師集 60

C 八代抄 480・小倉色紙・百人秀歌 57

E 後六々撰 42・永承四年内裏歌合 7

F 五代集歌枕上巻

G 今鏡第 1

H 仙台問語第二（能因嵐吹歌）・梅村載筆人巻・茗話

70 さびしさに「良退法師」

A 後拾遺集 333

C 八代抄 405・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙「ながむれどいづ

こ」・百人秀歌 58「いづく」

D 六華和歌集 635「いづく」

E 時代不同歌合 100

F 歌林良材抄・詞林拾葉・統歌仙落書 91 評「いづく」

G 尤の草紙（かなしき物）「いづく」

71 夕されば「大納言経信」

A 金葉集 173（三奏本 164）

B 経信集 103

C 八代抄 402・両近代秀歌 1、45・秀歌体大略 41・八代集秀逸・百人秀

歌 70

D 別本和漢兼作集 756・六華和歌集 642・題林愚抄 3213

E 時代不同歌合 2

F 古来風躰抄 503・別本八代集秀逸 84・西行上人談抄 49・桐火桶 150・三

五記 85・愚見抄 21・井蛙抄 8・師説自見抄・和歌一字抄 1147・和歌題

林抄・定家十鉢 147・詞林拾葉

72 音にきく「祐子内親王家紀伊」

A 金葉集 469（三奏本 464）「浦の」

B 祐子内親王家紀伊集 6「うらの」・俊忠集 5

C 八代抄 987・自筆本近代秀歌 81・八代集秀逸・百人秀歌 74

E 堀河院御時艶書合18・時代不同歌合126・女房三十六人歌合

F 井蛙抄「うらの」418

73 高砂の「前中納言匡房」

A 後拾遺集120

B 江師集23

C 八代抄98・八代集秀逸・五代簡要・小倉色紙・百人秀歌72

D 別本和漢兼作集74・題林愚抄926

E 時代不同歌合248

F 古来風躰抄414・別映八代集秀逸58・和歌童蒙抄672・和歌一字抄125、

132・五代集歌枕上巻・西行上人談抄26

74 うかりける「源俊頼朝臣」

A 千載集708

B 散木奇歌集1183「山おろし」

C 八代抄933・兩近代秀歌10、75「山おろしよ」・秀歌体大略86「山お

ろしよ」・八代集秀逸・小倉色紙「山おろしよ」

D 二八要抄・六華和歌集1453「よ」・題林和歌集6471

E 時代不同歌合118

F 後鳥羽院御口伝2「よ」・愚秘抄・三五記134、213・井蛙抄17「よ」・

師説自見抄・詠歌一躰37「よ」・定家十躰179

75 契をきし「藤原基俊」

A 千載集1026

C 八代抄1489・兩近代秀歌27、105・八代集秀逸・百人秀歌82

D 続詞花和歌集864・別本和漢兼作集514・六華和歌集937

F 別本八代集秀逸(院)129・桐火桶170・井蛙抄32

G 尤の草紙(かなしき物)

76 和田の原こぎ「法性寺入道前関白太政大臣」

A 詞花集382

B 田多民治集163

C 八代抄1667「まよふ」・八代集秀逸・百人秀歌79

D 後葉和歌集272「漕行くみれば」・題林愚抄9439

E 保延元年内裏歌合3・時代不同歌合12

F 古来風躰抄564・別本八代集秀逸109・和歌一字抄714

G 今鏡第5

77 瀬をはやみ「崇徳院」

A 詞花集229

C 八代抄934・秀歌体大略87・八代集秀逸・小倉色紙・百人秀歌77

D 久安百首76「ゆきなやみ岩にせかるる谷川のわれてすゑにもあはん

とぞおもふ」・後葉和歌集552「谷河の」

E 時代不同歌合154

F 古来風躰抄554・別本八代集秀逸(隆)106・歌林良材抄・耳底記・定

家十躰254「われてすゑにも」

78 淡路島「源兼昌」

A 金葉集270(三奏本271)

C 八代抄533・八代集秀逸・小倉色紙・百人秀歌81

E 藤川五百首286左注

F 別本八代集秀逸87・和歌一字抄539・和歌題林抄・和歌初学抄209「め

ざめぬ」・西行上人談抄33

79 秋風に「左京大夫顯輔」

A 新古今集413

B 顯輔集

C 八代抄316・遣送本近代秀歌13「もりいづる」・小倉色紙・百人秀歌

80「もりいづる」

D 久安百首338「ただよふ」

F 桐火桶164「もりいづる」・愚秘抄・井蛙抄19「もりいづる」

80 長からむ「待賢門院堀河」

A 千載集802

C 八代抄1053・百人秀歌78

D 久安百首1067・統詞花和歌集555・二八要抄「心は」

E 女房三十六人歌合

81 郭公「後徳大寺左大臣」

A 千載集161

B 林下集71

C 八代抄242・小倉色紙・百人秀歌86

D 六華和歌集353・題林愚抄2102

E 時代不同歌合236・治承三十六人歌合22

F 歌仙落書4

H 甲子夜話卷19

82 思ひわび「道因法師」

A 千載集818

C 百人秀歌83

D 二八要抄

83 世中よ「皇太后宮大夫俊成」

A 千載集1151

B 長秋詠藻146

C 八代抄1710・西近代秀歌20、110・八代集秀逸・小倉色紙「山の中に

も」・百人秀歌87

D 俊成卿述懷百首・題林愚抄3662

E 時代不同歌合30

F 桐火桶173「世中に」・愚秘抄・三五記215・井蛙抄26・正風体抄・詠

歌一駄39・水無瀬の玉藻

84 ながらへば「藤原清輔朝臣」

A 新古今集1843

B 清輔朝臣集400

C 八代抄1559・西近代秀歌18、106・百人秀歌84

D 歌苑抄

E 治承三十六人歌合10・中古六歌仙118

F 歌仙落書46・新撰歌仙・別本八代集秀逸(隆)143・桐火桶168・愚秘

抄・三五記68・井蛙抄24・師説自見抄・和歌題林抄・定家十駄94

85 よもすから〔俊恵法師〕

A 千載集 766 〔明けやらぬ〕

B 林葉集 683 〔明けやらぬ〕

C 八代抄 958 〔あけやらぬ〕・小倉色紙・百人秀歌 85

D 二八要抄

86 歎けとて〔西行法師〕

A 千載集 929

B 山家集 628

C 八代抄 1365・自筆本近代秀歌 100・秀歌体大略 103・八代集秀逸・百人秀

歌 88

D 六華和歌集 770・題林愚抄 7359

E 御裳濯川歌合 55・時代不同歌合 22

F 別本八代集秀逸 120・水無瀬の玉藻

87 村雨の〔寂蓮法師〕

A 新古今集 491

B 寂蓮法師集 289

C 八代抄 392・百人秀歌 93

D 自讃歌 144

E 老若五十首歌合 249

F 三五記 157・師説自見抄・瑩玉集 14・水無瀬の玉藻・定家十鉢 167・初

学一葉・耳底記・詞林拾葉

88 難波江の〔皇嘉門院別当〕

A 千載集 807

C 八代抄 1071・百人秀歌 89

D 二八要抄・題林愚抄 7236

H 河社

89 玉のをよ〔式子内親王〕

A 新古今集 1034

B 式子内親王集 319

C 八代抄 977・小倉色紙・百人秀歌 92

D 自讃歌 18・二八要抄

E 新三十六人撰・女房三十六人歌合

F 新撰歌仙・別本八代集秀逸〔隆〕 139・秘蔵抄・歌林良材抄・定家十

鉢 86

90 見せばやな〔殷富門院大輔〕

A 千載集 886

B 殷富門院大輔集 116

C 八代抄 1326・小倉色紙・百人秀歌 91

F 歌仙落書 111・定家十鉢 195

91 きりぎりす〔後京極摂政太政大臣〕

A 新古今集 518

B 秋篠月清集 751

C 八代抄 441・八代集秀逸・百人秀歌 95

E 正治二年院御百首 455

F 新撰歌仙・歌林良材抄・水無瀬の玉藻・井蛙抄 131

92 我袖は「二条院讃岐」

A 千載集 760 「まぞなき」

B 二条院讃岐集 51 「まぞなき」

C 八代抄 97・百人秀歌 94

D 二八要抄「まぞなき」・題林愚抄 7739

F 三五記 251 「我が恋は」

G 美人くらべ 3・小をとこ 6

93 世中は「鎌倉右大臣」

A 新勅撰集 525

B 金槐和歌集 572

C 百人秀歌 98

E 新三十六人歌合

94 みよしの「参議雅経」

A 新古今集 483

B 明日香井和歌集 344

C 八代抄 381・小倉色紙・百人秀歌 97

F 新撰歌仙

H 春夢独談上巻

95 おほけなく「前大僧正慈円」

A 千載集 1137

B 拾玉集 499

C 八代抄 1712・百人秀歌 96

E 慈鎮和尚自歌合 4・時代不同歌合 34・新三十六人歌合

F 別本八代集秀逸（隆） 123

96 花さそふ「入道前太政大臣」

A 新勅撰集 1052

C 小倉色紙・百人秀歌 101

97 こぬ人を「権中納言定家」

A 新勅撰集 849

B 拾遺愚草 2568

C 小倉色紙・百人秀歌 100

D 二八要抄・秋風抄序

E 建保四年内裏歌合 182・定家卿百番自歌合 124・新三十六人歌合・定家

家隆両卿撰歌合 75

F 和歌口伝 268・井蛙抄 68、232・ささめごと 58・正風体抄

98 風そよぐ「従二位家隆」

A 新勅撰集 192

B 壬二集 1934

C 百人秀歌 99

D 秋風抄序

E 新三十六人歌合・ささめごと 60

F 水無瀬の玉藻・詞林拾葉・資慶卿口授

99 人もおし「後鳥羽院」

A 続後撰集 1202

B 後鳥羽院御集 1472

C 小倉色紙

D 万代和歌集 353・明倫歌集

100 百歌や「順徳院」

A 続後撰集 1205

B 順徳院御集（紫禁和歌草） 800

C 小倉色紙

D 万代和歌集 309「しのぶぐさ」

E 新時代不同歌合 78

附 IV 百人一首類書翻刻五種

1 新百人一首

〔解題〕

『新百人一首』は、九代將軍足利義尚（常徳院）が撰定したもので、異種百人一首中最も成立の古いものである。写本には文明十五年十月二十四日の沙門道興の序文（または跋文）がある。また三条西実隆の『実隆公記』（文明十五年十月二十四日条）に、「参室町殿、大樹御新撰百人

一首以色列紙被遊之、拝見驚目也、御中書申出之、退出」とあり、義尚撰は間違ひあるまい。ただし序文の作者を実隆とし、道興はただ浄書しただけと見る説もある（井上宗雄氏『中世歌壇史の研究（室町前期）』282頁）。なお91番歌の作者従二位成忠女は、百人一首の54番歌の作者である儀同三司母のことなので、歌人は重複していることになる。

本書の伝本としては、写本も少なからず存する。版本は大きく二系統に分類することができる。一つは中院通村筆板下絵入本で、天和元年刊（山田喜兵衛板）の書籍目録大全では式外で売られている。もう一つは橘千蔭筆板下本である。こちらの方は『享保以後江戸出版書目』の享和三年二月四日不時条に、「新百人一首 墨付五十四丁 全一冊 / 享和三亥年二月 / 常憲院殿御撰 / 橘千蔭書 / 板元売出 近江屋与兵衛」と見えている。版本は共に書道手本を意識しているようで、千蔭本などは明治に至っても再版されている。

また元禄頃に別種の『新百人一首』が、徳川光圀によって編まれている。

なお今回の翻刻には、明暦三年版本を底本にした。

〔諸本〕

1 新百人一首 足利義尚編 絵入 中院通村筆板下 文明十五年道興跋

a 明暦三年刊 谷岡七左衛門板 大本二冊

b 元禄九年刊 中川栄政板 大本

2 新百人一首 足利義尚編 橘千蔭筆板下 聖議院道興准后跋

a 享和三年刊 万笈堂近江屋与兵衛板 大本

b 文化十一年再版刊 大本

c 天保八年刊 勝村治右衛門他板 大本

d 明治二十六年十二月刊 東生館 大本 『和文仮名習字用』

e 明治二十七年四月刊 博文館 大本 『仮名習字帖』

3 新百人一首 水戸義公撰 元禄年間成立

写本

4 新百人一首かるた 基時卿風書 明治18年成立

寂蕉書

〔翻 刻〕

1 新百人一首 明治26年1月刊

佐佐木信綱翻刻 標注七種百人一首 博文館

2 新百人一首 明治43年12月刊

十三種百人一首全 集文社袖珍文庫23

3 新百人一首 昭和59年11月刊

久曾神昇編 日本歌学大系別巻6 風間書房 歌書集成本

〔論 文〕

1 野中春水「新百人一首と後撰百人一首」国文論叢7・昭和33年12月

2 谷鼎「新百人一首」『群書解題10』（統群書類従完成会）昭和35年7月

3 綿拔豊昭「足利義尚『新百人一首』について」中央大学国文27・昭和

59年3月

〔本 文〕

1 龍田川紅葉みだれてながるめりわたらばにしき中や絶なむ 文武天皇

2 いもにこひわか松原みわたせばしほのひかたにたづなきわたる

3 玉くしげみむろ外山のさねかづらさねずはつるにありと見ましや 聖武天皇

4 山しろのいはだのをのははそはら見つや君が山路こゆらん 大織冠

5 谷風にとくる水のひまごとにうちいづる浪や春のはつ花 式部卿宇合

6 秋かぜに声をほにあげてくる舟はあまの戸わたる雁にぞ有ける 源當純

7 たちかへりちどり鳴なりはまゆふの心へだてておもふ物かは 藤原菅根朝臣

8 身のうさをおもひしりぬるものならばつらき心を何かうらみむ 亭子院

9 池水にくにさかへけるまきもくのたまきの風は今も残れり 忠義公

10 としふればよはひは老ぬしかはあれど花をしみれば物おもひもなし 清慎公

11 わがためはみるかひもなしわすれ草わするばかりの恋にしあらねば 忠仁公

12 神無月時雨にあへるもみぢばのふかば散なむ風のまにまに 中納言長谷雄

13 神無月時雨にあへるもみぢばのふかば散なむ風のまにまに 大伴池主

13 みそぎするならの小川のかは風に祈りそわたるしたに絶じと

八代女王

14 いさやこらかしゐのかたに白妙の袖さへぬれてあさなつみてむ

大納言旅人

15 山田もるそほづの身こそかなしけれ秋はてぬればとふ人もなし

僧都玄寶

16 ほのぼのと有明の月の月影にもみぢ吹おろす山おろしの風

源信明朝臣

17 我ならぬ草葉も物をおもひけりそてよりほかにおけるしら露

藤原忠国

18 神無月しぐればかりを身にそへてしらぬ山ぢにいるぞかなしき

増基法師

19 ちかひてもなほ思ふにはまけにけりたかためをしきいのちならねば

藏内侍

20 老にけるなぎさの松のふかみどりしづめるかげをよそにやは見る

源順

21 むねはふじ袖はきよみか関なれやけぶりも波もたたぬ日をなき

平祐挙

22 秋たちていく日もあらねどこのねぬるあさけのかぜは袂すずしも

安貴王

23 おぼつかないづこなるらむむしの音をたづねは草の露やみだれん

藤原為頼朝臣

24 世にふるにももの思ふとしもなけれとも月にいくたびながめしつらむ

具平親王

25 有明の月のひかりを待ほどにわがよのいたくふけにける哉 藤原仲文

26 わするなよほどは雲井になりぬともそらゆく月のめくりあふまで

橘忠幹

27 よし野山もみぢのいほりいかならむよそのあらしの音ぞはげしき

山田法師

28 世をそむく山のみなみの松風に苔のころもや夜さむなる覧 安法々師

29 しばしまてまだ夜はふかし長月の有明の月は人まどふなり 藤原惟成

30 ほととぎすなくさみだれうつへし田をかりかねさむみ秋そくれぬる

善滋為政朝臣

31 大井川そま山風のさむけきに岩うつ浪を雪かとぞみる

三条院女藏人左近

32 世中をなににたとへむ朝ぼらけこぎゆく船のあとのしらなみ

沙弥満誓

33 あられふるかたののみののかりころもぬれぬやどかす人しなけれは

藤原長能

34 有明の月もし水にやどりけりこよひはこえしあふさかの関

藤原範永朝臣

35 桜花あかぬあまりにおもふかなちらずは人やおしまざらまし

堀川右大臣

36 思ひあまりいかでもらさんおく山のいはかきこむる谷のした水

大納言公実

37 こよひ君いかなるさとの月を見て都に誰をおもひいづらむ 馬内侍

38 なみだ川身もうくばかりながるれときえぬは人のおもひ也けり

藤原元真

39 秋のよの月に心のあくがれて雲井に物をおもふころ哉 花山院

40 おもひかねわかれし野べをきてみればあさぢがはらに秋かせぞふく

源道濟

41 朝ごとに汀のこほりふみわけて君につかふる道ぞかしこき

土御門内大臣

42 逢坂のせきのいはかどふみならし山たち出るきりはらの駒

太宰大式高遠

43 木の葉ちるやどはききわくかたぞなきしぐれするよも時雨せぬ夜も

源頼実

44 あやなくもくもらぬよひをいとふかなしのぶのさとの秋のよの月

橘為仲朝臣

45 時雨つつかつちる山の紅葉はいかにふくよのあらしなる覧

修理大夫顕季

46 庭のおもは月もらぬまでなりにけり木ずゑに露のかげしけりつつ

白河院

47 かもめめるふぢえのうらのおきつすに夜舟いさよふ月のさやけさ

神祇伯顯仲

48 あらし吹ゆつきがたけに雲きえてひばらのうへに月わたるみゆ

後九条前内大臣

49 いそがれぬ年のこそあはれなれむかしはよそにききし春かは

三条入道左大臣

50 契りをきし人も木ずゑのこのまよいたのめぬ月のかけそりくる

法性寺入道前関白家堀川

51 いほりさすならの木かけはもる月のくもとみれば時雨ふるなり

瞻西上人

52 君すまばとはまし物を津の国のいくだのもりの秋のはつかぜ

僧都清胤

53 かへりこむほどをや人にちぎらまししのはれぬべき我身成せは

登蓮法師

54 さざなみやまの浜辺に駒とめてひ良のたかねの花をみる哉

從三位頼政

55 かりくらしかたののま柴おりしきてよどの川せの月を見るかな

左近中将公衡

56 わがこひはちぎのかたそぎかたくのみゆきあはでとしのつもりぬるか

な

大炊御門右大臣

57 後のよをなげく涙といひなしてしほりやせましすみ染の袖

太宰大式重家

58 秋はきぬとしもなかなばにすきぬとや荻ふく風のおどろかすらむ

寂然法師

59 月まつと人にはいひてながむれはなぐさめがたき夕ぐれの空

刑部卿範兼

60 わすらるるうき名はさてもたちにけり心のうちは思ひわけても

大江維順女

61 しる柴の露けき袖はたなばたもかさぬにつけてあはれとや見む

後徳大寺左大臣母

62 山ふかき草のいほりのあめの夜にをとせでふるはなみだなりけり

前大納言忠良

63 石川やせみのをがはのきよければ月もながれをたづねてぞすむ

鴨長明

64 春日野のしたもえわたる草のうへにつれなくみゆる春のあは雪

中納言国信

65 むさし野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風のすゑにふく覧

後久我前太政大臣

66 袖のうへにたれゆへ月はやどるぞとよそになしても人のとへかし

藤原秀能

67 春の雨のあまねき御代をたのむかな霜にかれゆく草葉もらすな

大蔵卿有家

68 かげきよきよもぎがほらの秋の月霜をてらさばすてずもあらなん

大納言通具

69 うきよをばいづる日ごとにとへどもいつかは月のいるかたをみん

八条院高倉

70 みちのくのいはでしのぶはえぞしらぬかきつくしてよつばのいしぶみ

前右大将頼朝

71 雨ふれば小田のますらおいとまあれやなはしろ水を空にまかせて

勝命法師

72 夢かとよみしおも影もちぎりしもわすれずなからうつつならねは

皇太后宮大夫俊成女

73 しきみつむ山ぢの露にぬれにけりあかつきをきの墨ぞめの袖 小侍従

74 きくやいかにうはのそらなる風だにも松におとするならひありとは

後鳥羽院宮内卿

75 山さとのいなばのかぜにね覚して夜ぶかく鹿のこゑをきくかな

中宮大夫師忠

76 いかだしよまでこととはむみなかみはいかばかりふく山のあらしそ

藤原資宗朝臣

77 あやしくぞかへさは月のくもりにしむかしがたりによや更ぬらん

法橋行遍

78 あさぢ山色かはりゆく秋風にかれなでしかのつまをこふ覧

正三位知家

79 みな人はそむきはてぬる世の中にふるのやしろの身をいかにせん

惠子内親王

80 山里は世のうきよりもすみわひぬことのほかなる峯のあらしに

宜秋門院丹後

81 かきながすことの葉をだにしづむなよ身こそかくてもやま河の水

従三位行能

82 おなじくはあれないにしへおもひ出のなければともしのばすもなし

源季景

83 たのめつつこぬよつものうらみてもまつよりほかのなぐさめぞなき

平忠度朝臣

84 高砂のやまの山とりをのへなるはつ尾のたれおながくこふらむ

前大納言為家

85 夕日さすとを山もとの里みえてすすきふきしく野べの秋かせ

藤原隆祐朝臣

86 いかにせむしなばともにとおもふ身のおなじかぎりのいのちならずは

藤原光俊朝臣

87 萩の葉に風のをとせぬ秋もあらはなみだのほかには月のみてまし

入道二品親王道助

88 松のしたいはねの苔にすみ染の袖のあられやかけししら玉 高弁上人

89 さとの海士のかりそめなりしちぎりよりやがてみるめのたよりをぞと

ふ
藤原雅顕

90 つたへこしわがみちしばの冬がれにまよはむあとの名こそつらけれ

藤原信実朝臣

91 夢とのみおもひなりにしよの中をなにいまさらにおどろかすらん

従一位成忠女

92 さきのよにたれむすびけむ下ひものとけぬつらさを身のちぎりとは

安嘉門院四条

93 萩のはに有けるものを花ゆゑに春もうかりし風のやどりは

天台座主澄覺

94 神代より道あるくにつかへけるちぎりもたえぬせきのふぢかは

光明峯寺入道前撰政左大臣

95 うらがるるあしのすゑ葉に風すぎていり江をわたる秋のむら雨

常磐井入道前太政大臣

96 いつよりか秋のもみちのくれなるになみだの色のならひそめけん

中務卿宗尊親王

97 秋の色をおくりむかへて雲の上になれにし月も物わすれすな

土御門院

98 有明のそらにわかれしいもがしまかたみのうらに月ぞのこれる

後嵯峨院

99 わすれずよみはしの花の木のまよりかすみてふけし雲のうへの月

伏見院

100 あし原やみだれし国の風をかへて民の草葉もいまなびくなり 花園院

百人一首和歌とて大津の宮そのかみかりはの露のふる事まで承久の百敷の軒忍ふのことの葉にいたるまで世中につたはれるは京極中納言みつからの山さとの障子におされたるを今の代までもてあそひとせるならし。しかあるをこの比柳の糸のよりよりに其外の歌仙の歌とも更に色ことなる紙ともにかきいたしましたるをみたてまつるへきよし仰事侍し。御筆のいきほひすみつき此世のものと見えすめなれぬさまなところ言葉の及かたく是そちとせのたからに侍へきとおろかなる心のうちにも有

かたくおもひ奉りてさる後えらひいたされたる。けにたくひなくめてたき御筆に侍れはかるくつたへまほしとて御中かきを申いたしてまかてたりし。又右の文箱壁の中にもおさめをき侍るへきはたやすくひらきみるへきにしあらされはさらにかたのやうにうつしをきてこれを明くれ枕こにすへしとや。

小倉山しくれふりにしいにしへのあとにもこゆる言葉そこれ

文明十五年神無月下四日としひのもとにて筆を染をはりぬ

沙門判

(本云) 是は常德院殿(將軍) 御作撰云々跋は聖護院の准后道興被遊之由云々以左中弁兼秀本享祿二年九月十三日書写之終功畢

永祿九年十二月二日書之

這新百人一首以中院内大臣通村公芳翰令刊行之者也

干時明曆第三天丁酉臘月中旬

谷岡七左衛門板行

2 後撰百人一首

〔解題〕

尾崎雅嘉の『群書一覽』には、二条良基が藤原定家の小倉百人一首に

做って『続百人一首』として撰定し、その後虫損による不明歌六首を中院関白昭実公(『後撰百人一首』序文は顕実とする)が補ったとある。これが事実だとすれば、『後撰百人一首』は最古の異種百人一首ということになる。しかし信頼できる古写本はまったく存せず、文化四年になって突然刊行されたこと、あるいは『新統古今集』から十首入集していることなどからして、偽書(偽撰)である可能性が高い(ひょっとすると序文を書いた富小路貞直あたりが真の撰者かもしれない)。ただし伊藤敬氏は良基原撰の立場をとっておられる。

本書の伝本は意外に少なく、写本の存在はほとんど聞かない。版本にしても、文化四年版以外に異版は見当たらないようである。ただし『享保以後江戸出版書目』の文化五年辰十一月十四日不時条には、「後撰百人一首 墨付五十丁 全一冊 / 文化四年卯夏 / 二条良基公御作 / 旭江画 / 板元 大阪多田勘兵衛 / 売出 西村宗七」とあって、板元が異なっている。また享和二年刊の『群書一覽』に文化四年刊の『後撰百人一首』が見えており、この場合は写本で流布していた可能性が認められる。ただしそれが古写本なのか寛政十二年以後の稿本なのかは未詳。あるいは寛政十二年版が存するのだろうか。『享保以後大阪出版書籍目録』には、「後撰百人一首 一冊 / 校合者 睦柳窓(尼崎市) / 板元 奈良屋長兵衛(博労町) / 出願 寛政十三年二月 / 許可 享和元年四月六日」という記述があるが、その詳細な内容は不明。

また同名の異種として、島津久光の『後撰百人一首』(嘉永五年成立)がある。

なお翻刻の底本として、文化四年版本を使用した、頭注部分は全て省略している。

〔諸本〕

- 1 後撰百人一首全 伝一条良基撰 関白顕実補 筒井尚堂書 淵上旭江画 寛政十二年序『続百人一首』
- 文化四年刊 播磨屋喜助 柏原屋清右衛門板 大本 書袋付 *宮武・福井*
- 2 後撰百人一首 島津久光編 嘉永五年成立

〔翻刻〕

- 1 後撰百人一首 明治26年1月刊
佐佐木信綱翻刻 標注七種百人一首 博文館
- 2 後撰百人一首 明治43年12月刊 (35銭)
十三種百人一首全 集文社袖珍文庫23
- 3 後撰百人一首 (伝一条良基編 文化四年版) 昭和44年12月刊
吉田幸一・神作光一翻刻 東洋大学紀要文学部編23 東洋大学図書
館蔵百人一首類書目録解説稿附録
- 4 後撰百人一首 (伝一条良基編 文化四年版) 昭和47年3月刊
伊藤嘉夫翻刻 跡見学園女子大学紀要5 異種百人一首十種―主として秀歌を輯めたもの―
- 5 後撰百人一首 (伝一条良基編 文化四年版) 昭和54年4月刊

伊藤敬翻刻 中世説話の世界 笠間書院

6 後撰百人一首 昭和59年11月刊

久曾神昇編 日本歌学大系別巻6 風間書房 絵入板本

〔論文〕

- 1 野中春水「新百人一首と後撰百人一首」国文論叢7・昭和33年12月
- 2 伊藤敬「後撰百人一首」翻刻・解題『中世説話の世界』(笠間書院) 昭和54年4月

〔本文〕

建武のみたれより君臣上下ころころに九重をいてみやこちかきし
るへのかたへしりそきたまひける中に後普光院摂政殿下は嵯峨の中の院
に世の塵をさけおはしましける時京極中納言の跡にやならはせ給ひけん。
天曆の御門より其比の君臣に至るまでおほし出るままに時代のあとさき
をもつてすみ心によしとおほすまをかいあつめおかせ給ひけるか其
後六首(あるひは八首とも)虫はみほろひたるを後の中の院関白(顕実
公)殿下おきなはせひて後撰百人一首と名つけたまひけるとなん。此本
は彼御家の太夫のもとより長門の国阿武の春日の祠の宮司波多野なにか
しか家につたへたりしをうつして梓にちりはむることにはなりぬ。

みけつ国名庭わたりに住人の後撰百人一首といへるふみに秋の田の鴨の
はしかきかきたうへよとこへり。こは良基のおとこの御撰とかやいひつ

たへてうみをなす長門の春日の宮つかさの家にひめ置し書とそ。抑もも
つ人の歌をあつめしは定家の中納言の賢寂入道のもとに随ひてかいっ
けおくられしを始として後の世にも是かれ集し人もあれと彼おととのみ
えらひは石上ふりにしころよりいかかさきいかなる事にか聞つたへさり
しか今なむ呉竹の世におほやけになりなは誰も玉くしけ底たからと
木綿花のめてさかえて此たはかりをも谷くくのさわたるきはみまてよろ
こひにおもひつつ言のはの露のふる事を幹の忍ふのしのはさらめやも。

寛政申のとし 霜月中の二日

おほきみつの位さた直しるす

1 影みえて汀にたてる白菊はおられぬなみの花かとぞみる 村上天皇

2 白雲のたえずたな引峯にだにすめば住ぬる世にこそありけれ

惟喬親王

3 沖つかせふきしくうらの芦のはのみだれてしたにぬるる袖かな

常磐井入道前太政大臣

4 咲花のをのがいろにやうつるらん千ぐさにかはる野へのゆふ露

祝部成光

5 萩の葉に風の音せぬ秋もあらば涙の外に月はみてまし

入道 三品親王道助

6 心をも跡をもとめずあくがれてあはれうき身の友千どりかな

法印公順

7 たかせさす六田のよどの柳原みどりもふかくかすむ春哉

8 わしの山いかにすみける月なればいりての後も世を照らすらん

法橋顯昭

9 心だに通はばなどか鳩とりのあしまをわくる道もなからむ 後光厳院

10 いつはりと思ひもはてばいかかせむ待をたのみの夕ぐれ空

前大納言経長女

11 吹のぼる木曾のみさかの谷風にこずゑもしらぬ花をみるかな 鴨長明

12 下もえに思ひ消なむ煙だに跡なき雲のはてぞ悲しき

皇太后宮大夫俊成女

13 唐衣袂ゆかたにつつむかなわが身にあまる君がめぐみを

後普光國院攝政太政大臣

14 ももしきにうつし植てぞ色そはむはこやの山の千代のくれ竹 花園院

15 幾夜わが家路忘れて斧の柄の朽木のそまの月をみるらむ 法印淨弁

16 あさひ山まだかげくらき明ぼのにきりのした行宇治のしば舟

權大納言資明

17 行秋のたむけの山のもみぢばはかたみばかりやちりのこるらむ

禎子内親王家摂津

18 きりぎりすいたくな啼そ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる

藤原忠房

19 年経ぬるよどのつぎはし夢にだにわたらぬ中と絶やはてなむ

光明峯寺入道前摂政左大臣

20 千早振かもの社の神もきけ君わすれずは我も忘れじ 馬内侍

21 久堅の天照月の桂川秋の今宵の名に流れつつ 山階入道前左大臣

22 住吉の松のあらしも霞む也遠里をのの春の曙 覚延法師

23 とにかくにうきは此世の習ひぞとおもへば身をもうらみやはする

平親清女

24 橋の勾ひをさそふ夕風に忍ぶ昔ぞ遠ざかり行 平維貞

25 いくたびもかきこそやらめみづぎのをかのかやはらなびくばかりに

入道贈一品親王尊円

26 をのが音につらき別のありとだに思ひもしらでとりや啼らむ

藻辟門院少将

27 逢事は思ひ絶ぬる暁もわかれしとの音にぞなかる 藤原重頼女

28 すみよしの松もわが身もふりにけりあはれとおもへ秋の夜の月

西園寺前太政大臣

29 等閑に思ひしほどやつつみけむ恨にあまる袖の涙を 勝部師綱

30 立こむる霧の籬の夕月夜うつれば見ゆる露の下艸 前参議為秀

31 沖つ風ふけるの浦に寄波のよるともみえず秋の夜の月 小侍従

32 すみよしの浅沢をののわすれ水絶々ならで逢よしもがな 藤原範綱

33 思ふにはふかき山路もなきものを心の外に何尋ぬらむ 平泰時朝臣

34 恋しのお昔の秋の月かけを苔の袂のなみたにぞみる 法眼行濟

35 かねの音は霞のそこに明やらでかげほのかなる春の夜の月

前大納言為家

36 呉竹の折伏音のなかりせば夜ふかき雪をいかでしらまし 坂上明兼

37 手枕ののべの草ばの霜がれに身は習はしの風の寒けさ 兼好法師

38 タづく夜しほみちくらし難波江のあしの若葉をこゆる白なみ

藤原秀能

39 曇りなきかがみの山の月をみてあきらけき世をそらにするかな

宮内卿永範

40 しら波のかけても人に契りきやこと浦にのみみるめかれとは

衣笠内大臣

41 玉藻かるかたやいづくぞ霞立あさかの浦のはるの明ぼの

前中納言為相

42 郭公忍ぶのみだれ限りありてなくやさつきの衣手の森 津守国冬

43 つつみえぬ涙也けり郭公声をしのぶの森のした露

後照念院関白太政大臣

44 庵しめてすむとは人にみえずともこころのうちの山かけもがな

安嘉門院四条

45 しぐれかと聞ば木のはの降ものをそれにもぬるるわが袂かな

藤原資隆朝臣

46 池水にますみのかがみかけそへて塵もくもらぬあきの夜の月

冷泉前太政大臣

47 よとともにこひわたれども天の川あわせは雲の余所にこそあれ

源雅光

48 現には語る便もなかりけり心のうちを夢に見せばや 前左兵衛督教定

49 来ぬまでも待はたのみの有ものをうたてあけ行鶏の声哉 平頼泰

50 はし立や松吹わたる浦風に入海遠くすめる月かけ 大江茂重

51 たれとなきやどの夕を契りにてかはる主をいく夜とふらむ 藤原業清

52 解そむるわがした紐はさきの世にたが結びける契り成覧

藤原為明朝臣

53 葉がへせぬ松のひまよりもる月は君が千年のかけにぞありける

源忠季

54 うしとみし人よりも猶つれなきはわすらるる身の命也けり 源兼泰

55 きぎすなく交野のみの花すすきかりそめにくる人なまねきそ

藤原時房

56 もろともにみしをかたみの月だにも朽なばそでにかけや絶なむ

前大納言良教

57 袖にさへ秋の夕はしられけりきえしあさちが露をかけつつ

女御徽子女王

58 儼りなきかげもかはらず昔しままの入江の秋の夜の月

前右兵衛督為教

59 紅葉せぬときはの山はふく風の音にや秋を聞わたるらむ 紀淑望

60 君はかく忘貝こそ拾ひけれうらなきものはわが心かな

三条院女藏人左近

61 おもふ事いはで心のうちにのみつもる月日をしる人のなき 弁内侍

62 ひめ小松おほかるのべに子日してここに千代をまかせつる哉

源道濟

63 わかれ行都のかたの恋しきにいざ結びみむ忘れ井の水 斎宮甲斐

64 恨ても恋ひても経ぬる月日哉忍ぶばかりをなぐさめにして

後山本前左大臣

65 風はやみとしまが崎を漕ゆけば夕なみ千どりたちる啼也 神祇伯頭仲

66 やましろの水のの里に妹を置いていく度よどの舟よばふ覧 従三位頼政

67 松島やをしまが崎の夕がすみたな引わたせたあまのたぐなは

前参議親隆

68 色かはるこころの秋の蔦かつら恨をかけて露ぞこぼるる 伏見院

69 秋のののはな分衣みやこまで色はやつさじ見む人のため

二条院三河内侍

70 わすれては世をすてがほにおもふかなのがれずとても数ならぬ身を

夢窓国師

71 逢みしは昔がたりのうつつにてそのかねごとを夢になせとや

土御門内大臣

72 紅のやしほの風のもみぢばをいかにそめよと猶しぐるらむ 藤原伊光

73 かよひぢのなきにつけてぞ忍ぶ山つらきこころのおとはみえける

前大納言為定

74 くもるともよしや泪のますかがみ我おもかげはみてもかひなし

高階宗顕

75 花の散ことやわびしき春霞たつたの山の鶯の声 藤原後蔭

76 暮て行としのすかたはみえねども身につもりてぞあらはれにける

藤原実清朝臣

77 夏衣まだひとへなるうたたねに心してふけあきのはつかぜ 安法法師

78 月かげのさすにまかせて行舟はあかしのうらやとまりなるらむ

藤原実光朝臣
79 わが恋はみやまがくれの艸なれやしげさ増れどしる人のなき

小野良材

80 物思ふ水上よりや涙川袖に流るものと成けむ 従二位業子

81 忘れしの言のはいかに成にけむたのめしくは秋風ぞふく

宜秋門院丹後

82 衣櫛音を聞にぞしらぬる里遠からぬ艸枕とは 俊盛法師

83 あはれにも巡りあふ夜の月かけを思ひいれずや人はみるらん

永陽門院少将

84 このもとをすみかとすればおのづからはなみるひとになりぬべきかな

花山院

85 あら玉のとしの終になるごとに雪も我身もふりまさりつつ 在原元方

86 天の川秋の七日をながめつつ雲のよそにも思ひけるかな 大蔵卿有家

87 さみだれに淀の川岸水こえてあらぬわたりに舟よばふらし

左近中将定親

88 露をなとあだ成ものと思ひけむ我身も草におかぬばかりを 藤原惟基

89 秋風に声を帆にあげてくる舟は天の戸わたる雁にそ有ける

藤原菅根朝臣

90 言の葉にそへても今はかへさばやわすらるるみに残るおもかけ

遊義門院権大納言

91 春霞かすめるかたや津のくにのほのみしま江のわたりなるらむ

源頼家朝臣

92 よしさらば身をあきかぜに捨てておもひもいれじ夕ぐれ of 空

源家長朝臣

93 君が植し一むらすすき虫の音のしげきのべとも成にけるかな

三春有輔

94 月艸の花ずり衣かへすよはうつろふ人ぞ夢にみえける 前僧正公朝

95 君が代の千とせの松のふかみどりさはがぬ水にかけはみえつつ

藤原長能

96 とへかした尾花がもとの思ひ艸しほるるのべの露はいかにと

右衛門督通具

97 むねはふじ袖は清見が関なれや煙も浪もたたぬ日ぞなき 平祐舉

98 巻向の松原の山の呼子どりはなのよすがに聞人ぞなき 土御門院

99 数ならぬ三室の山の岩こすげいはねばしたに猶みだれつつ 頓阿法師

100 をのづから都にかよふ夢をさへまたおどろかす峯の松風

近衛関白左大臣

筒井尚堂書伯手次

淵上旭江畫宗縮図

彫生 浪華 藤木金兵衛

文化龍集丁卯夏新鵠

大坂書舗 播磨屋喜助

柏原屋清右衛門

3 武家百人一首

〔解題〕

『武家百人一首』は数多い異種百人一首の中で、最も刊年の早いものである。その撰者としては、榊原忠次があげられているが、確固とした証拠はない。尾崎雅嘉が『群書一覽』に、「播州姫路ノ城主式部大輔榊原忠次の撰なり」として以来、それが受け継がれているだけである。その榊原忠次に関しても、同姓同名の人物が複数存在しており、その中で天文九年に亡くなった忠次と、慶長十年に生まれた忠次（松平）の二人が撰者に想定されている。もし前者が撰者であれば室町時代成立ということになり、後者であれば江戸前期成立ということになる。万治三年の跋が成立時期のものであるとすると、後者の方が適当であろうか。なお伊藤嘉夫氏は、寛文六年に姫路城主榊原忠次はまだ生まれていないとおられるが、それはどうも誤解のようである。

本書の伝本は、写本としても多く伝わっている。版本としては、寛文六年谷岡七左衛門板絵入本系と、寛文十二年鶴屋喜右衛門板師宣絵入本系の二系統に大別することができる。寛文十年刊の増補書籍目録に「武者百人一首（二冊）常徳院集」とあるのも、おそらく武家百人一首のことであろう。ただし延宝三年刊の新增書籍目録には、武者百人一首（二冊）と武家百人一首（一冊）が並記されている。しかし面白いことに、元禄十年以降は武家百人一首しか出てこない。ところで師宣の百人一首関係絵入本はこれが嚆矢であり、その後『百人一首像讀抄』（延宝六年、

天和三年、元禄五年刊）、『小倉山百人一首』（延宝八年刊）、『姿絵百人一首』（元禄八年刊）など続々と登場する。そのため模刻版（師宣風画）も上方を中心に続出しており、『新撰絵抄百人一首』（延宝七年刊）、『増補百人一首絵抄』（延宝八年刊）、『百人一首三略抄』（延宝九年刊）、『百人一首諸抄大成』（元禄十年刊）、『百人一首万葉』（元禄十三年刊）などをあげることができる。

『武家百人一首』は時代的な迎合もあって広範に流布し、異種百人一首としては珍しいことであるが、複数の注釈書まで出現している。更にその二番煎じも少なくなき、伊達吉村の『新撰武家百人一首』（享保頃成立）、賞月堂主人の『武家百人一首』（安政五年刊）、富田良穂の『武家百人一首』（明治四十三年刊）、松平定以の『後撰武家百人一首』（文政七年成立）、同『続武家百首』（文政六年成立）などが出版されている。源満昭の『勇猛百人一首』（安永七年刊）、緑亭川柳の『英雄百人一首』（天保十五年刊）、笠亭仙果の『武稽百人一首』（嘉永六年刊）などその類例である。ついにながら、天和元年刊（山田喜兵衛板）の書籍目録大全では二処で売られている。

なお諸本によって、配列の相違や語句の異同も存するようであるが、ここでは翻刻の底本として、便宜的に元禄十六年版本を使場した。

〔諸本〕

1 武家百人一首 伝榊原忠次撰 絵入 室町時代成立か 万治三年跋
『新百人一首』

寛文六年刊 谷岡七左衛門板 大本 *宮武・福井*

2 武家百人一首 伝榊原忠次撰 師宣画 室町時代成立か『注入頭図』

寛文十二年刊 鶴屋喜右衛門板 大本 *福井*

3 武家百人一首全 伝榊原忠次撰 絵入

元禄十六年新刻刊 林正五郎板 渋川清右衛門板 菊地喜兵衛板

大本 *福井*

4 武家百人一首 賞月堂主人山田東作著 玉蘭斎貞秀画

a 安政五年刊 椀屋伊兵衛板 中本

b 明治初期刊

5 武家百人一首 富田良穂撰

明治四十三年刊 私家版活版本 豊橋市

6 武家百人一首 漢雪抄 今井氏書

写本 [跡見・静嘉堂]

7 武家百人一首抄 武詠聚玉卷一所収

文政七年写 [静嘉堂]

[翻 刻]

1 武家百人一首 大正刊

修養文庫明教和歌集 修養文庫刊行会

2 武家百人一首 大正7年2月刊

物見高見編 広文庫17 広文庫刊行会

3 新撰武家百人一首 (伊達吉村撰 明治43年刊)・武家百人一首A (榊原

忠次撰 江戸初期写)・武家百人一首B (賞月堂主人著 安政五年版)・

武家百人一首C (富田良穂撰 明治42年刊) 昭和46年3月刊

伊藤嘉夫翻刻 跡見学園短期大学紀要7、8 武家百人一首と其の

類列の百人一首

4 武家百人一首 昭和59年11月刊

久曾神昇編 日本歌学大系別巻6 風間書房 9首欠落

[本 文]

1 雲井なる人をはるかにおもふには我心さへ空にこそなれ 経基王

2 きみはよし行すゑ遠しとまる身の待ほといかかあらんとすらん

三位源満仲

3 かくなんとあまのいさりひほのめかせ磯部の波のおりもよからは

源頼光朝臣

4 かたかたの親のおやとちいはふめり子のこの千代をおもひこそやれ

藤原保昌朝臣

5 君ひかすなりなましかはあやめ草いかなる根をかけふはかけまし

左衛門尉平致経

6 都には花の名残をとめ置いてけふ下芝につとふ白雪 源頼義朝臣

7 吹風をなこそその関とおもへ共道もせにちる山桜かな 源義家朝臣

8 しつのめかしつはた布のぬきにうつうの毛のぬのの程のせはさよ

清原武則

9 夏の日にちるまで消るうす氷春たつかせやよきて吹らん

(頼光孫) 左衛門尉源頼実 (頼国子)

10 思ふ事なくてや春をすくさましうき世へたつるかすみなりせは

兵庫頭源仲正

11 行人をまねくか野辺の花すすきこよひもここにたひねせよとや

平忠盛朝臣

12 人しれぬ大内山の山もりはこかくれてのみ月をみる哉 従三位源頼政

13 身のうさも花みしほとは忘れき春の別をなけくのみかは

伊豆守源仲綱

14 今までもあれば有かの世中に夢のうちにゆめをみる哉

中納言平教盛

15 難波かた芦の丸やの旅ねには時雨を軒の雪にそしる 参議平経盛

16 荒にける宿とて月はかはらねとむかしの影はなをそ恋しき

平忠度朝臣

17 住なれしふるき都のこひしさは神も昔に思ひしるらめ 正三位平重衡

18 なかなかにたのめさりせは小夜衣かへすしるしは見えもしなまし

従三位平資盛

19 なかれてのなたにもとまれ行水の哀はかなき身は消ぬとも

左馬頭平行盛

20 散るそうきおもへは風もつらからし花をわけても吹はこそあらめ

平经正朝臣

21 まとろめは夢にもみえぬうつつにも忘るるほとつかのまもなし

右大将頼朝卿

22 夜もすからたたく水鶏の天の戸をあけて後こそ音せさりけれ

源頼家朝臣

23 いせ島や塩くむ袖の月かけを波に残してかへるあま人 伊予守源義経

24 秋風に草葉の露をはらはせて君かこゆれば関守もなし 平景季(梶原)

25 武士の取つたへたるあつさ弓ひきては人のかへる物かは

平景高(梶原)

26 ゆふくれば衣手すすし高円の尾上の宮の秋のはつかせ

鎌倉右大臣実朝 (頼朝次男)

27 世中の麻は跡なく成にけり心のままの蓬のみして 平泰時朝臣(北条)

28 武隈の松のみとりもうつもれて雪をみきとや人にかたらむ

源河内守光行

29 いたつらに行てはかへる年月のつもるうき身にもそ悲しき

式部丞源親行

30 あたにのみおもひし人の命もてはなをいくたひ惜みきぬらん

蓮生法師 (宇都宮卜野守入道)

31 おもひあればたのめぬ夜半もねられぬを待とや人のよそにみるらん

平重時朝臣

32 つらかりし春のわかれは忘れてあはれとそきく初雁の声

平政村朝臣 (三浦)

33 梅か香の誰里わかす匂ふよはぬしさたまらぬ春かせそふく 行念法師

34 さたまなき時雨の雨のいかにして冬のはしめを空にしるらん

真昭法師 (北条三郎)

35 霰ふる雪のかよひち風さえて乙女のかさし玉そみたる

源義氏朝臣（足利）

36 さひしさはいつくもおなしことはりにおもひなされぬ秋のゆふくれ

武蔵守平長時（北条）

37 篠の葉にさやく霜よの山かせに雲さへこほる有明の月

佐渡守藤原基綱

38 草葉のみ露けかるへき秋そとは我袖しらて思おもひける哉

下野守藤原景綱

39 よしさらは我とはささし海士小船みちひく汐の波にまかせて

（塩屋右兵衛尉）信生法師

40 人しれすいつしか落る涙川あふせにかへて名をなかつとも

千葉助平氏胤

41 山の端のみえぬはかりそわたつ海の波にも月はかたふきにけり

素還法師（東平胤行）

42 いにしへの野中のし水汲ね共おもひ出てそ袖ぬらしける

常陸助惟示（忠秀）

43 行末の空はひとつにかすめ共山もとしくたつつけふり哉

（秋田）丹波守藤原頼景

44 つれなくてなにかうき世に残るらん思ひも出ぬ有明の月

（小山）出羽守藤原宗朝

45 富士の根を山よりうへにかへりみて今こえかかるあしからの関

信濃守藤原行朝

46 おきつ風吹こす磯の松かえにあまりてかかる田子のうらふち

藤原宗泰（中浪）

47 みやこおもふ旅ねの夢のせきもりはよひよひことのあらしなりけり

左衛門大夫藤原基任

48 散花の雪とつもらは尋ねこししほりをさへやまたたとらまし

源頼隆（主見）

49 忘れ草心なるへき種たにもわか身になとかまかせさるらむ

平宗宣朝臣

50 大井川水も秋は岩こえて月になかる水のしらなみ

平経貞朝臣

51 夢ならてまたは誠もなきものを誰名つけけるうつつなるらむ

右近将監平義正

52 吹はらふ嵐にすみて山の端の松よりたかくいつる月かけ

平貞時朝臣

53 世を捨るかすにさへこそもれにけれうきみの末をなをたのむとて

左衛門尉藤原頼氏

54 岑にたつ雲も別て芳野川あらしにまさるはまのしら浪

土岐伯耆守源頼貞

55 みし友はあるかすくなきおなしよに老の命のなに残るらん

右衛門尉藤原範秀（小串）

56 古郷にこよひはかりの命共しらてや人の我をまつらむ

（菊池）寂阿法師

57 我袖の涙にやとるかけとたにしらて雲井の月やすむらん

58 おしとたにいはぬ色とて山吹の花ちるさとの春を暮行

等持院贈太政大臣尊氏

59 いつとても待たすはあらねとおなしくは山郭公月に鳴なん

從三位源直義

60 妻恋ひに涙やおちて作男鹿の朝たつ小野の露とをくらん

贈左大臣源義詮

61 鶴か岡木高きまつをふくかせのくも井にひひく万代の声

(足利) 從三位基氏

62 いにしへにかはらぬ神のちかひならは人の国まで治めさらめや

右兵衛督源直冬

63 春といへは昔たにこそかすみしか老のたもとにやとる月かけ

上野介源高国(信之)

64 とはすともさはるとせめてきかすなよまつをたのみのゆふくれの空

伊豆守藤原重能

65 音たにも秋にはかはる時雨哉木葉ふりそふ冬や来ぬらん 源清氏朝臣

66 はつ秋はまたなからぬ夜半なれは明るやおしき星合の空

播磨守高階師冬

67 梓弓もとの姿は引きかへぬ人へき山のかくれ家もなし 陸奥守源信武

68 定めなきよをうき鳥のみかくれて下やすからぬ思ひなりけり

(佐々木) 佐渡判官入道道普

69 徒に待はくるしき偽をかねてよりしるたくれも哉 源氏頼(六角)

70 露霜のをかへの真島うらみわひ枯行秋にうつらなく也

左京大夫源氏経

71 みやこにはまたしきほとの時鳥深き山路をたつねてそきく

伊予權守高階重成(大高)

72 うつもれぬけふりを宿のしるへにて雪にしほくむ里のあま入

元可法師(葉師寺)

73 数ならぬ身は中々にうき事をならひになしてなけかすも哉

源直頼(赤松)

74 たのむかな我みなもとを岩清水流れの末を神にまかせて

鹿園院太政大臣

75 かりねするいななさ原うきふしもしらてや今宵月にあかさむ

(足利) 養徳院太政大臣満詮

76 しつかなる心のうちやまつかけの水よりも猶すすしかる覧

(細川) 源頼之朝臣

77 あはさりしつらさをかこつことの葉に今たにぬるる新枕かな

(山名) 陸奥守源氏清

78 春はなを咲ちる花のなかに落る芳野の滝もなみやそふらん

源義将朝臣

79 こひしなぬ身のためつらき命ともさてなからへる契りにそしる

陸奥守棟義

80 秋来ぬと萩の葉ならすかせの音に心せかるる露のうへ哉

(今川) 源貞世(法名了俊)

81 ひかすのみふるの早田の五月雨にはさぬ袖にもとる早苗かな

(大内) 多々良義弘朝臣

82 心なき尾花か袖も露そをく秋はいかなるゆふへなるらむ 源重春朝臣

83 すむはそらにこるは土と別にしそのいにしへも袖そしるらむ

勝定院贈太政大臣義持

84 霜むすふ野原の浅茅うらかれて虫のねよはる秋かせそふく

権大納言源義嗣

85 郭公まつよひ過て難面は明るくも井に一こゑも哉

(細川) 源頼元朝臣

86 聞き馴し木葉の音はそれなから時雨にかはる神無月かな

(佐々木) 源高秀朝臣

87 かこたしな春や昔の夜半の月わか身ひとつにかすむかけかは

源詮信 (桃井)

88 夕立の雲の衣はかさねてもそらに涼しきかせの音かな

(源) 普広院左大臣義教

89 おもひたつくもの余所めの偽はあるようれしき山さくら哉

満之朝臣 (細川)

90 秋ふかきをのの浅茅のつゆなから末葉にあまるむしのこゑかな

源持信 (一色)

91 みな川の川みねより落る紅葉ははつもりてなみをまたや染覽

正三位源義重 (斯波)

92 一めみしかたのの小野にかかる草のつかのまもなと忘さるらん

源範政朝臣

93 なをさりになかわへしやは忘られて物おもふ頃のゆふくれの空

(東平) 素明法師

94 さらてたにほさぬ袖師の浦千鳥いかにせよとてね覺とふらん

多々良持世朝臣

95 鳥のねのつらき斗をうつつてゆめにそこゆるあふさかのせき

平貞国

96 けふはまつ思ふ斗の色みせて心のおくをいひはつくさし

(源) 慈照院太政大臣

97 友もなき夜半の枕のたちはなやむかしをかたるにほひなるらん

太智院贈太政大臣 (源)

98 霞とも花ともいはし初せ山ひはらくもる春のよの月

(太政大臣) 常徳院

99 日をそへて袖の湊もせきあへす身をしる雨のそらのみたれに

(太政大臣) 惠林院 (源義植)

100 月みはと契りや置し作男鹿の来る秋ことにつまこひのこゑ

(太政大臣) 法住院源義高公

和歌は我国の風俗として皆人のもてあそひとなれり。武門の身にしては弓馬のいとなみしけく外の学に心をよする暇なからまし。されとも古今集の序に貫之かかけける言葉にたけきもののふの心をもなくさむるはうたなりといへるために源平ふたつの家のみにあらずもろの武将和歌をつらね侍るもおほければ京極黄門の小倉の山庄の障子にかきをかれけ

るかすになそらへて武士百人の歌をひとつつつかきて武家百人一首と名付侍るにこそ。しかあれと歌のよしあしをえらひさたむるにあらず。撰集に入ても歌のかすすくなくひとりひとつたつのたくひおほし。あるはかなふみにみえ侍るなどをめにするを幸にして唯武将の名たかきをもたさすうたにほまれある人をも捨かたくかきあつめ武士百の名をあらはし侍らんとめならんかし。

元禄十六歳六月上旬 林正五郎板

4 犬百人一首

〔解題〕

「犬」と名の付くパロディ作品は少なくない。たとえば「犬枕」「犬筑波集」「犬つれづれ」などなど。ここに翻刻する「犬百人一首」もその一つであり、数多く刊行された百人一首もじりの中では、最も古いものであろう（国書総目録では近藤清春の『江戸名所百人一首』を寛文三年刊とするも、現在の研究では享保頃刊と考えられている）。更に絵入本としても、寛永頃刊の『素庵本百人一首』や寛文六年刊の『武家百人一首』に継ぐものであり、その資料的価値は高い。ただし、残念ながら挿絵の絵師は未詳。また作者幽双庵（賀近）を、字体の近似から幽双庵としているものもあるので要注意。

本書の伝本は極めて少なく、寛文九年版本と、その後刷である元禄十年版本がわずかに数本存在するだけである。またこれに関する論文は見当たらない。ただし寛文十年以降の書籍目録には多出しており、たとえば天和元年刊（山田喜兵衛板）では二匁で売られており、元禄九年刊（河内喜兵衛板）では一匁五分で売られている。なお底本として、稀書複製会本「犬百人一首」（三百部之内第二十一号）を使用した。

〔諸本〕

1 犬百人一首 幽双庵著 絵入 『狂歌絵本犬百人一首』

a 寛文九年刊 栗山宇兵衛板 大本 「赤木文庫・狩野文庫・森文庫」

b 元禄十年刊 安浦市兵衛板 大本 『狂詠犬百人一首』〔国会〕

〔影印・翻刻〕

1 犬百人一首 大正8年7月刊（非売品）300部

幽双庵編 寛文九年刊 米山堂稀書複製会13回 大本 51丁

2 犬百人一首 大正15年6月

書物往来315（19） 懐古造紙（九） 翻刻

3 犬百人一首（幽双庵撰 寛文九年版）昭和49年3月刊

伊藤嘉夫翻刻 跡見学園女子大学紀要7 異種百人一首叢刊（四）
— 本歌なをし・百人一首もじり十一種 — 翻刻

4 犬百人一首 昭和52年6月刊

近世文学資料類従仮名草子編26 勉誠社 赤木文庫本影印

5 犬百人一首 昭和59年4月刊

狂歌大観2 参考篇 明治書院 狩野文庫影印・翻刻

〔本文〕

1 あきれたのかこれ囲碁の友をあつめ我だまし手は終にしれつつ

鈍智てんほう

2 はり過てなくれにけらし白ふくに衣着るてふ尼のなりさま

女郎てんじん

3 あしき木のもきとりの此すたり物ながながら柿ひとつかはなむ

柿売人ぬき

4 薪うりに打出てみればしらうとの買へる高値に欲ははりつつ

山辺商人

5 奥様に拍子ふみ分一曲の声きける時ぞ銭やかねじき 猿若太夫

6 かかが身の沙汰せる恥にあく顔のしろきをみれば氣そつきにける

忠右衛門かかもち

7 飴の腹味はひ見れば味がないいなるの山にこねし土かも 飴中買

8 我が腹はたつるにいたみしかとする世をうち針と人は云也 氣積法師

9 仮名のいろはさがりにけりな文つらに我身絵にふれうかめせしまに

鹿野のこまん

10 これ小歌聞もうたふも若衆は知るもしらぬも大酒の席 千松

11 あの野ばら此島かけて咲出ぬと床にはいけよ花の釣舟 しんき高ふり

12 旦那風質屋のかよひ路吹とぢよこぶくめの姿しはしとめむ

僧正貧僧

13 煩にみな肉おちし身骨皮肥そつもりてふとく成ける 養生院

14 銭かねをしのぶたこずり何ゆへにみられそめにし舞ならなくに

河原の舞太夫

15 主のため晴の供に出て草履とる我衣手に土は落つつ 奉公伝蔵

16 立わかる鞠場のあちのすみに生る松としきけば杳の音とん

中納言ひらおもて

17 すはやとる闇夜もきかずたつたものから瓜臍中くるとは

瓜原なりひらいの朝臣

18 富士行の法によるの身よるものや旅のかよひ路人目よからむ

富士行者年詣朝臣

19 所帯がたみしかき足のつめほどもふみしめて世はしはくてよとや

いちや

20 あびぬれは湯に肌をなて柔和なる身を洗てもあらんとそおもふ

眉目よしの聲

21 御訴訟といひしばかりの長縁に埒明の殿を待出つる哉 訴訟法師

22 売からに草双紙でもやすければむべかふ人のうれしと云らむ

本屋安売

23 ねて見れば度々に耳こそすましかれわが目ひとつの夜にはあらねど

大寝の夜聡

24 度々は医者もとりあへずたはけやまひもちひの持葉あひ間あひ間に

疳氣

25 名をとらば大高声の修羅變人にしられた諷ともかな 三条謡うたひ

26 ふじの山唐の者ども心あらば今ひと旅の深雪めでなん 唐人公

27 いかい腹あきて泣るるいつもいつ麦めしか恋しかるらむ

中間勘介

28 やまひものはひえぞくるしさまさりける人めもかさのはれぬと思へは

源胸痛朝臣

29 心あてにおらばやおらんふれる粉のつきまどはせる餅花のえだ

大路小路みつ子

30 ある酒につれなくしめし亭主より赤づらばかりうき物はなし

壬生只寝

31 朝出てありたけの銭のなき迄に吉野の遊山くらす籠のり 坂上籠のり

32 あつかはに顔はらしたる賤が身は人ともあはぬ慢じ也けり

張臂馬鹿頬

33 おやかたのしかりくどきき晴の日に何ころなくはなのたるらむ

此供者

34 誰かにも大平にせん高ぶりのやつも我身の主ならなくに 武士童殿風

35 人は医者心もちとふりくすり疵ぞおかしの香に匂ひける

火のつらやけ

36 くすり箱はまた宵ながらあけぬるを小者いづこにつめふせるらむ

気よはりの葎薬師

37 しろ粉に風の吹しく見せ棚はちらめきとめぬ渣ぞ立ける 粉屋朝ねし

38 破らるる身をは思はずしめてしてふたのゆもじのおしくも有哉

おかん

39 朝ゆふに捨物士のわれ仕なぶれとあまりになどか下手のかいしきや

んげ捨物士

40 死をみれど色に出にけり我欲は物やほしきと人のとふまで 寺墓もり

41 悔捨やふわかけには名も立にけり人づれにこそあそびそめしか

壬生只居

42 けづりきなかた木に袖をすりこすりすぐの松の木ゆがませじとは

番匠童又介

43 あびてみての水をは後にくらぶれば昔は手あしほめかざりけり

権中納言あつやみ

44 おふものの絶てしなくは中々にせつく人をもうらみさらまし

中納言あさまし

45 あはれともいふべき道はしらずして身の馬鹿づらに成ぬへきかな

慥貪公

46 世間をばわたる皆人中をたえ道理もしらぬ我ころかな

すねのあせただ

47 若もの等しげれるやどのいみじきに人こそくすめういて来にけり

浮ふ法師

48 疵を痛み敵の手なみにをのが身のきられて物を思ふ比かな

源にげゆき

49 身かきさすり寝てのはだかの夜はひえて昼はほえつつ物をこそおもへ

おなか痛み薬吞朝臣

50 うらぬ時ほしからざりし利分さへ高くもがなとおもひぬる哉

ふりうりの物高

51 客とだにいへばいふ氣のさしつ事さしも汁たきもゆる加減を

殿原の亭主かたの朝臣

52 はへぬればぬくる物とはしりながら猶うらめしき長ほう毛かな

藤原髭のお朝臣

53 なくれつつ独める夜のあくる日はいかに氣のせく物にかはあらふ

歌うたひ道者母

54 本腹のやまひの末はかたければ灸をかぎりの命ともがな

医道三知祖母

55 滝呑はたべて久しくなりぬれと酒そ流れて名はきこえける

大上戸金蔵

56 あられなき子もちの外のおもひ出に今ひと度の風流もがな

和泉屋おせき

57 せりあひてみしや無利共わかぬまにいひほぐれせきよはる負かな

無利数奇おきく

58 ひがし山あそぶさはらは身はふけどいてそよ人の花車なやはある

内裏おさん

59 やすらはで寝なまし物を酒うけてかたふく迄の樽をみしかな

赤づらのおまん

60 お湯の山いくとて道の遠ければまたふみださす先は毒だて

腰氣身内室

61 薫物はならの土産の八重一重けふ爰許に匂ひぬるかな 傾城太夫

62 身をほめていふそらごとにはかるとも世にあるさかし人はゆるさじ

せんしやうおげん

63 今は只小舞絶なんとはかりに人だめにしていひをしゆかな

隠居能太夫いちまし

64 ぶらりぶらり宇治の川狩たれたれもあそんでわたる人のあちな氣

権十郎沙汰よき

65 売ず詫ほさぬ鮎だに有物を塩にくちなむ名こそおしけれ 嵯峨おみつ

66 丸裸哀とおもへ寒垢離は鼻より外にすする物なし 大鹿相行人

67 晴の夜の婦ばかりなる小枕に髪うすからん名こそおしけれ ず坊内儀

68 苦勞にもあらでうく世にながらへりや是然るへき夜の月見かな

繁昌院

69 あそびうくお室の山の紅葉見は桂の川の月見成けり 能なし法師

70 ともしさに宿を立出てたづぬれは円山もおなじ客のかねくれ

靈山法師

71 タざれば門出の舟路音ふれてあらき波間に大風ぞふく

だいたん常の氣

72 音をきく尿しのばばのきたなきはかけじや袖のよこれこそすれ

養子大家家のお乳

73 だだくさの庭のさくらの咲にけりわが目の霞たたずもあらなむ

権中納言だくさ

74 うきやりける人ははづさん知音ぶりよ是然りとはつのらぬものを

いな者年寄朝臣

75 ねぎり置しさしもの質を命にてあはれことしの極もすぐめり

不自由物なし

76 京の町つい出てみればけさ笠のくもりにむかふれも人なみ

法性寺笠売時宜輕薄大氣大吉

77 背をくぐめ婢にせかるる親子中のわれても末になをらんとぞ思ふ

舅あん

78 あはれ至極加様利とりの商人のいく借銀をすめぬ先無利

皆さまのかねかり

79 薄の衣装きかめく雲の絶間よりもれ出る地の色のさやけさ

歌舞妓太夫うきすけ

80 ながか覧心はもたすしら紙のすかさでいつも物をこそいへ

短氣者院おふり

81 ふる狐啼つる方を詠れはたたあかめしのわけそ残れる

有徳大福左大臣

82 米に詫扱も後生はあるものをうきに絶ぬは阿弥陀なりけり 道心法師

83 世の中よ餅こそよけれ思ひ入る山のおくにも茶屋ぞあるなる

広太物くふの太夫損せふ

84 存命は又子の子もやしのばれんよしとみし予そ人はほめてき

藤原器用介子孫

85 終夜後世おもふ事は絶やらぬ(て) 部屋の昼さへ余儀なかりけり 信よひ法師

86 あがけとて酒やは物に狂はする酔泣がほの我なみたかな 酔狂法師

87 酔さめの時宜もまたひぬ酒の場に茶はたて出さずいやの湯をくれ 茶くれぬ法師

88 何か絵の芦のかれ葉の一もとに氣をつくしてや染わたるべき 紺掻者院ばいた

89 手間の直よとへならとへねはからへば仕なぐる事のごはりもぞする 職人内義

90 見せはやなおしはの厄の小袖だにもくれにぞくれし物はおします 隱居者院妙祐

91 すりきりすなくて霜夜のさむいのに着物かり出し人めよくせん お狂骨せんしやう寒大政大臣

92 我達躰は塩路にみゆる海士乙女の人こそほめねかつきぶりよし 二条通おすぎ

93 世の中は銭かねもがななきさけびあまりおほねのたたでかなしも 釜屋う右衛門

94 さんおきのやどの秋かぜさよふけてとふ人さむく横手うつせ 算おきまさあい

95 覚えなくうく世の席にあそふかな我のむ酒にしみぞめの袖 酒大僧正自慢

96 はなさせぬたらしの意氣の君ならてふりうく物は徳利也けり

入道酒大上戸大臣

97 来ぬ客をまつばの茶だすお数奇屋にする火ばしの身もこかれつつ

御忠功茶道

98 風いとひまるのおかわの用意してむさげぞ老のしるし也ける

おぢい古流

99 下手もうし下手もうらめしあぢきなく名をおもふ故に物思ふ身は

後藤院

100 物数奇やふるきねごろのおしきにも猶あまりあるお菓子なりけり

潤沢院

陶家の琴は弦なけれども其声いたれり。少林の笛は穴あらされともその音遠し。かの小倉の隠士は百首の色紙をひそかにえらふといへとも其音其声あらはることし。爰に賀近山庄の句を狂詠に翻転して笑のたねをまくは瓜の終になりたるを見てこれを味はふ人ひいやりとせずといふ事なし。誠に此道に年久しくなれなれ茄子のへたのをよぶべきところにはあらざる作り物なり。

それのとの其日蝋貝室の雨たれに筆をぬらし侍る

幽双菴寛文九巳酉歳中夏上旬

5 愛国百人一首

〔解題〕

異種百人一首の最後に、愛国百人一首（昭和17年11月20日発表）を掲載する。これは成立の動機が、戦時下における国民の愛国心を鼓舞することだったため、終戦後ほとんど無視され、むしろ積極的に忘れさられてしまった。

しかしながら、その内容はともかくとして、たとえば二種の愛国百人一首が存在することなどはあまり知られていない。また紙不足の時代であつたにもかかわらず、国家の政策に迎合するものであるためか、その異本の種類と発行部数（全何十万部？）は驚異的でさえある。押し付けの感否めないものの、三十数種の出版物（含書道手本・カルタ）が、ごく短期間に版を重ね、国内はもとより台湾や中国でも大量に出回ったこと、外国語訳も存すること、そしてそれがわずか二年あまり（昭和17年11月～19年）で絶版になってしまったことなど、日本の出版文化史において、大きなエポックメイキングであつたことは間違いない。思想面は無視しても、これだけは学問的に評価しなければならないと思う。

なお愛国百人一首の本文は、『定本愛国百人一首解説』を底本とする。それは底本の緒論に、

「愛国百人一首」は、既に昨昭和十七年十一月二十日をもって、東京市内発行の各新聞紙上に発表し、精査を加へた結果、作者の姓名に用ゐた文字、又その訓などに、多少の誤のあつたことを発見した

ので、正誤をも発表してゐる。今は選定委員として改訂を加ふべき点を見出し難い状態となつたので、これに「定本」と冠し、「定本愛国百人一首」といふ題名をもって、新たに単行本の形式によつて発表することとなつた。(3頁)

とあることによる。

〔単行本〕

- 1 愛国百人一首 昭和16年8月刊 (1円) *異種*
- 川田順撰 東京 大日本雄弁会講談社 昭和15年11月~16年6月キ
ング連載 141頁 昭和16年11月再版 [影月堂・跡見]
- 2 愛国百人一首 昭和18年4月刊 (非売品)
- 岸本俊夫編 東京市役所発行 100頁 [影月堂]
- 3 愛国百人一首 昭和18年7月刊 (1円90銭) 一万部
- 窪田空穂著 木俣武画 東京 開発社 274頁 昭和19年3月再版
(1円95銭) 六千部 [影月堂・跡見]
- 4 愛国百人一首 昭和18年8月刊 (15円)
- 西田玉堂筆 榊原子恭画 大阪 国民出版社 木箱入色紙百枚
[跡見]
- 5 愛国百人一首 昭和18年8月刊 (各1円50銭) 上五千部 下二千部
- 樋口尾山書 日本文学報国会編 奈良 長楽会出版部 上下二冊
上52頁 下53頁 [影月堂]
- 6 愛国百人一首 昭和18年9月刊 (3円60銭) 三千部

神部晚秋著 東京 大日本出版社峯文荘 特大本 104頁 [影月堂・跡見]

7 愛国百人一首 昭和19年3月刊 (5円) 二千二百部

比田井小琴著 東京書学院 107頁 (小琴愛国百人一首帖) [跡見]

8 愛国百人一首絵入歌留多 昭和18年11月刊 (2円80銭)

小出伝市 西沢笛敵画 日本玩具統制協会 [跡見]

9 愛国百人一首絵ハガキ 昭和18年頃刊

松本盛昌画 東京 愛国社 8枚入 [影月堂]

10 愛国百人一首解釈 昭和18年刊 (?)

田口由美香著

11 愛国百人一首歌曲集1 昭和19年刊 (?)

日本蓄音機レコード文化協会編 28頁

12 愛国百人一首字習帖 昭和18年11月刊 (2円10銭) 一万部

仲田幹一著 東京 泰東書道院出版部 大本 105頁 [影月堂]

13 愛国百人一首かるた 昭和17年12月刊 (1円)

日本文学報国会編 日本教育玩具製造株式会社発行 [影月堂]

14 愛国百人一首かるた 昭和17年12月刊 (?)

山内積良 京都 山内任天堂 [跡見]

15 愛国百人一首色紙帖 昭和18年4月刊 (1円50銭) 五千部

安東正郎書 日本文学報国会編 奈良 松林堂 横本 55頁 [影月堂・跡見]

16 愛国百人一首帖 昭和18年12月刊 (8円30銭) 五千部

大沢竹胎書 東京 萩原屋文堂 147頁 [影月堂・跡見]

17 愛国百人一首通釈 昭和18年1月刊 (25銭) 一万部

関西連合教育会著 大阪 五車書房 61頁 [影月堂]

18 愛国百人一首手習鑑 昭和18年3月刊 (非売品)

西川鉄児編 東京 東亜書学院 64枚 [跡見]

19 愛国百人一首手習帖 昭和18年4月刊 (2円50銭) 三千部

平尾花笠著 東京 泰東書道院 101頁 昭和18年11月再版 (2円60銭)

〔跡見・資料館〕

20 愛国百人一首年表 昭和19年1月刊 (1円) 一万部

日本文学報国会編 東京 協栄出版社 145頁 [影月堂]

21 愛国百人一首のころ 昭和18年7月刊 (95銭)

中谷幸次郎著 台北 南方圈社 並製版 156頁

22 愛国百人一首早わかり 昭和17年12月刊 (1円)

遠藤隆吉監修 東京 建軍精神普及会 (愛国かるた付き) 100頁

昭和18年2月改訂版 [影月堂・跡見]

23 愛国百人一首評釈 昭和17年12月刊 (15銭)

牧野靖史編 大阪 国進社出版部 75頁 『愛国百人一首』 [福田]

24 愛国百人一首評釈 昭和18年5月刊 (2円80銭) 一万部

川田順著 大阪朝日新聞社 294頁 昭和19年12月三版 (2円75銭)

一万部 [影月堂・跡見]

25 愛国百人一首物語 昭和18年11月刊 (3円10銭) 五千部

松村英一著 東京 天佑書房 450頁 [影月堂・跡見]

26 愛国百人一首略解 昭和18年3月刊 (20銭)

長馬圭之編 名古屋 文章社 小本 60頁 [福田]

27 英訳愛国百人一首 昭和19年刊 (?)

本多平八郎著

28 絵と解愛国百人一首 昭和18年4月刊 (1円60銭)

梅田章著 台北 大木書房 214頁 昭和18年5月重版 [影月堂・跡見]

〔跡見〕

29 桜花国歌話 (全訳愛国百人一首) 昭和18年刊 (?)

錢稻孫著 北京

30 国魂—愛国百人一首の解説— 昭和60年9月刊 (2000円)

西内雅著 錦正社 230頁 [影月堂・跡見]

31 書愛国百人一首 昭和18年2月刊 (6円) 三千部

内山雨海著 東京 大新社 160頁 [影月堂・跡見]

32 定本愛国百人一首解説 昭和18年3月刊 (1円20銭) 二万部

久米正雄 日本文学報国会編 東京毎日新聞社 214頁 昭和18年7月再版七万部 [影月堂・跡見]

月再版七万部 [影月堂・跡見]

33 手習愛国百人一首 昭和18年10月刊 (4円50銭) 5千部

源元公子書 駿々堂 106頁 昭和19年9月再版 [跡見]

34 平明評釈愛国百人一首 昭和18年5月刊 (2円50銭)

数野兵治著 北京 永増書房 248頁 [国学院]

〔論文〕

- 1 「愛国百人一首」大阪朝日新聞社21日新聞・昭和17年11月
- 2 「愛国百人一首」大阪毎日新聞社21日新聞・昭和17年11月
- 3 「愛国百人一首成る―万葉より幕末まで―」書物展望13-1・昭和18年1月
- 4 宇佐見文雄「愛国百人一首」発案の記録」書物展望13-8・昭和18年8月
- 5 中島利一郎「愛国百人一首」の漢訳と馬来訳」学苑10-10・昭和18年10月
- 6 藤森朋夫「愛国百人一首と決戦生活」解釈と鑑賞9-3・昭和19年3月
- 7 伊藤嘉夫「百人一首と佐佐木信綱・愛国百人一首前後―愛国百人一首A（川田順撰 昭和15年刊）・愛国百人一首B（日本文学報国会 昭和17年刊）―」跡見学園女子大学紀要4・昭和46年3月刊
- 8 高崎隆治「愛国百人一首」の時代」『生きて再び逢ふ日のありや―私の「昭和百人一首」―』（梨の木社）昭和62年12月

〔本文〕

- 1 大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも 柿本人麻呂
- 2 大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声 長奥麻呂
- 3 やすみししが大君の食国は大和も此処も同じとぞ念ふ 大伴旅人

4 千萬の軍なりとも言挙げず取りて来ぬべき男とぞ思ふ 高橋虫麻呂
5 をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして

山上憶良

6 ますらをの弓末振り起し射つる矢を後見む人は語りつぐがね 笠金村
7 あしひきの山にも野にもみ狩人さつ矢手挟みみだれたり見ゆ

山部赤人

8 旅人の宿せむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群 遣唐使使人母
9 わが背子はものな思はし事しあらば火にも水にも吾なけなくに

安倍女郎

10 み民吾生けるしるしあり天地の栄ゆる時にあへらく思へば

海犬養岡磨

11 大君の命かしこみ大船の行きのまにまに宿りするかも 雪宅麻呂

12 あをによし奈良の京は咲く花のにはふがごとく今さかりなり 小野老

13 降る雪の白髪までに大君に仕えまつれば貴くもあるか 橘諸兄

14 天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか 紀清人

15 新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪のふれるは 葛井諸会

16 唐国に往き足らはして帰り来むすらす武雄に御酒たてまつる

多治比鷹主

17 すめろぎの御代栄えむと東なるみちのく山にくがね花咲く 大伴家持

18 大君の命かしこみ磯に觸り海原渡る父母をおきて 丈部人麻呂

19 真木柱はめて造れる殿のごとくいませ母刀自面変りせず 坂田部麻呂

20 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は来にしを 大舍人部干文

21 今日よりはかへりみなくて大君のしこの御盾と出で立つ吾は

今奉部與會布

22 天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫の島をさして行く吾は 大田部荒耳

23 ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふいのちは母父がため 神人部子忍男

24 翁とてわびやは居らむ草も木も栄ゆる時に出でて舞ひてむ 尾張浜主

25 海ならずたへる水の底までも清き心は月ぞ照らさむ 菅原道真

26 山のごと坂田の稲を抜き積みて君が千歳の初穂にぞ春く 大中臣輔親

27 もろこしも天の下にぞ有りと聞く照る日の本を忘れざらなむ

成尋阿闍梨母

28 君が代はつきじとぞ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限は 源経信

29 君が代は松の上葉におく露のつもりて四方の海となるまで 源俊賴

30 君が代にあへるは誰も嬉しきを花は色にも出でにけるかな 藤原範兼

31 み山木のその梢とも見えざりし桜は花にあらはれにけり 源頼政

32 宮柱したつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日の御影かな 西行法師

33 君が代は千代ともささじ天の戸や出づる月日のかぎりなければ

藤原俊成

34 昔たれかかる桜の花を植ゑて吉野を春の山となしけむ 藤原良経

35 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも 源実朝

36 曇りなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまづ祈るかな 藤原定家

37 末の世の末の末まで我が国はよろづの国にすぐれたる国 宏覚禪師

38 西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ 中臣祐春

39 勅として祈るしるしの神風に寄せくる浪はかつ砕けつつ 藤原為家

40 命をばかろきになして武士の道よりおもき道あらめやは 源致雄

41 限なき恵を四方にしき島の大和島根は今さかゆなり 藤原為家

42 思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世もただ君の為 藤原師賢

43 君をいのる道にいそげば神垣にはや時つけて鶏も鳴くなり 津守国貴

44 もののふの上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらむ 菊池武時

45 かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとどむる 楠木正行

46 鶏の音になほぞおどろく仕ふとて心のためむひまはなければ

北畠親房

47 いのちより名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなければ

森迫親正

48 あぶぎ来てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ

三条西実隆

49 あぢきなやもろこしまでもおくれじと思ひしことは昔なりけり

新納忠元

50 富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり

下河辺長流

51 行く川の清き流れにおのづから心の水もかよひてぞすむ 徳川光圀

52 ふみわけよ日本にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは 荷田春満

53 大御田の水泡も泥もかきたれてとるや早苗は我が君の為 賀茂真淵

54 もののふの兜に立つる鍬形のながめ柏は見れどあかずけり 田安宗武

55 すめ神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やまづ霞むらむ

楳取魚彦

56 天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は残れり 橘枝直
57 千代ふりし書もしるさず海の国のまもりの道は我ひとり見き 林子平
58 我を我としろしめすかやすべらぎの玉のみ声のかかる嬉しさ

高山彦九郎

59 あし原やこの国ぶりの言の葉に栄ゆる御代の声ぞ聞ゆる 小沢蘆菴
60 しきしまのやまと心を人とはば朝日にはふ山ざくら花 本居宣長
61 初春の初日かがよふ神国の神のみかけをあふけ諸々 荒木田久老
62 八束穂の瑞穂の上に千五百秋国の秀見せて照れる月かも 橘千蔭
63 香具山の尾上に立ちて見渡せば大和国原早苗とるなり 上田秋成
64 遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮かぶ木々のもみぢ葉 蒲生君平
65 かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが楽しさ 栗田士満
66 大日本神代ゆかけて伝へつる雄々しき道ぞたゆみあらずな 賀茂季鷹
67 青海原潮の八百重の八十国につぎてひろめよ此の正道を 平田篤胤
68 一方に靡きそろひて花すすき風吹く時ぞみだれざりける 香川景樹
69 安見ししわが大君のしきませる御国ゆたかに春は来にけり 大倉鷺夫
70 かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや
藤田東湖
71 わが国はいともたふとし天地の神の祭をまつりごとにて 足代弘訓
72 君がため花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな
加納諸平
73 大君の宮敷きましし樞原のうねびの山の古おもほゆ 鹿持雅澄
74 大君のためには何か惜しからむ薩摩のせとに身は沈むとも 僧月照

75 大君の御贄のまけと魚すらも神代よりこそ仕へきにけれ 石川依平
76 君が代を思ふ心のひとすぢに吾が身ありとはおもはざりけり

梅田雲浜

77 身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおかまし日本魂 吉田松隆
78 岩が根も砕かざらめや武士の国の為にと思ひ切る太刀 有村次左衛門
79 鹿島なる師霊の御剣をここに磨ぎて行くはこの旅 高橋多一郎
80 天皇に仕へまつれと我を生みし我がたらちねぞ尊かりける

佐久良東雄

81 天さかる蝦夷をわが住む家として並ぶ千島のまもりともがな

徳川齋昭

82 朝廷辺に死ぬべきいのちながらへて帰る旅路の憤ろしも 有馬新七
83 大君の御旗の下に死してこそ人と生れし甲斐はありけれ 田中河内介
84 しづたまき数ならぬ身も時を得て天皇がみ為に死なむとぞ思ふ

児島草臣

85 君がため命死にきと世の人に語り継ぎてよ峰の松風 松本奎堂

86 天皇の御楯となり死なむ身の心は常に楽しくありけり 鈴木重胤

87 曇りなき月を見るにも思ふかな明日はかばねの上に照るやと

吉村庸太郎

88 君が代はいはほと共に動かねば碎けてかへれ沖つしら波 伴林光平

89 ますらをが思ひこめにし一筋は七生かふとも何たわむべき

渋谷伊與作

90 みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそ思へ

佐久間象山

91 執り佩ける太刀の光はもののふの常に見れどもいやめづらしき

久坂玄瑞

92 大君の御楯となりて捨つる身と思へば軽き我が命かな 津田愛之助

93 青雲のむかふす極すめろぎの御稜威かがやく御代になしてむ

平野国臣

94 大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の日本だましい 真木和泉

95 片敷て寝ぬる鎧の袖の上に思ひぞつもる越の白雪 武田耕雲斎

96 武夫のたけきかがみと天の原あふぎ尊め丈夫のとも 平賀元義

97 後れても後れてもまた君たちに誓ひしことをわれ忘れめや 高杉晋作

98 武士のやまと心をより合はせただひとすぢの大綱にせよ 野村望東尼

99 男山今日の行幸の畏きも命あればぞをろがみにける 大隅言道

100 春にあけてまづみる書も天地のはじめの時と読み出づるかな 橘曙覧

日本文学報国会短歌部会選定委員

1 佐佐木信綱 2 尾上柴舟 3 太田水穂 4 窪田空穂 5 斎

藤瀏 6 斎藤茂吉 7 川田順 8 吉植庄亮 9 折口信夫 10

松村英一 11 土屋文明

☆本稿作成に際し、跡見学園短期大学図書館並びに福田秀一先生の御蔵書を拝見させて頂いた。記して御礼申し上げます。